

# 十勝のアイヌ文化と川

## 第3章

### アイヌ文化期の年表 ..... 108

はじめに 擦文さつもん～アイヌ文化と「大和」・「元」 ..... 110

#### 1. アイヌ文化の始まりとチャシ

- ① アイヌ文化の全体的な特色 ..... 112
- ② アイヌ文化の広がり ..... 113
- ③ アイヌ文化期の自然のようす ..... 114
- ④ 川を見下ろす「チャシ」 ..... 116

コラム 目で見る自然の大変化 ..... 115

#### 2. 伝統的な暮らし

- ① 川で食べ物をとる ..... 118
- ② サケを使った料理 ..... 122
- ③ 「道」としての川と「コタン(集落)」 ..... 126
- ④ 「チブ」に乗って川に行く ..... 128
- ⑤ チセ(家)の建て方と川 ..... 130
- ⑥ 語って伝える・歌やおどりで伝える ..... 132

コラム シシャモは「スサム」から ..... 119  
魚以外の食べものをとる ..... 121  
「ルイベ(ルイベ)」のあれこれ ..... 123  
サケ皮のくつ「チェブケリ」 ..... 125  
とても長い歴史をもつ丸木舟 ..... 129  
アイヌ文化の手工芸 ..... 133

#### 3. カムイとともに

- ① 「カムイ」って何だろう? ..... 134
- ② 「カムイ」としての川 ..... 135

#### 4. 和人とのかかわり

- ① 交易こうぎとアイヌ文化 ..... 136
- ② 松前藩まつまえはんの交易支配こうぎしはいと「場所」 ..... 137
- ③ シヤクシャインの戦い ..... 138
- ④ 「場所」での支配しはいの「民営化」 ..... 140
- ⑤ 「探検」される十勝 ..... 142
- ⑥ 開拓者たちをむかえ入れるアイヌ民族 ..... 143

#### 5. アイヌ文化の危機、そして新たな発展

- ① アイヌ文化の否定 ..... 144
- ② 乱獲らんかくと大雪によるシカの「絶めつ」 ..... 145
- ③ 川でのサケ漁さけいしの禁止 ..... 146
- ④ 農民化と「保護」そして農地改革 ..... 148
- ⑤ アイヌ文化の新たな発展 ..... 150

コラム 晩成社ばんせいしゃとアイヌの人々とサケ ..... 147  
農業経営のうぎやうけいえいに成功したアイヌの人もある ..... 149  
十勝のアイヌ民族に関する口承と記録 ..... 151

#### 注「十勝のアイヌ文化」

アイヌ文化は、同じ北海道内でも地方によってちがいががあります。この本では、十勝のアイヌ文化を中心に紹介しているので、ほかの地方とはことばなどが異なる場合があります。

#### 年号の表記

江戸時代以前

西暦のみ

〔例：1789年〕

明治時代以降

和暦（西暦）

〔例：明治29年（1896）〕

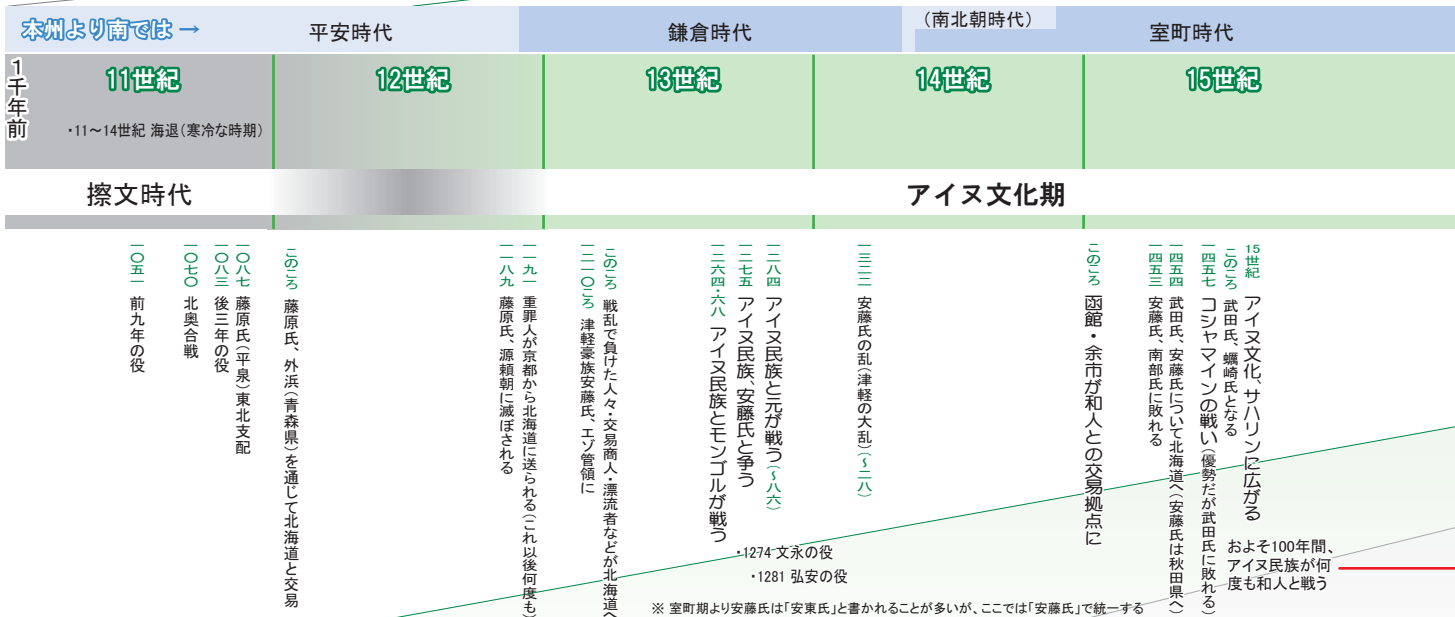
# アイヌ文化期の年表

アイヌ文化の成立は、本州の文化を受けつぎ、本州の影響を受けながらアイヌ文化は成立します。やがて、和人の支配や開拓によって危機をむかえます。

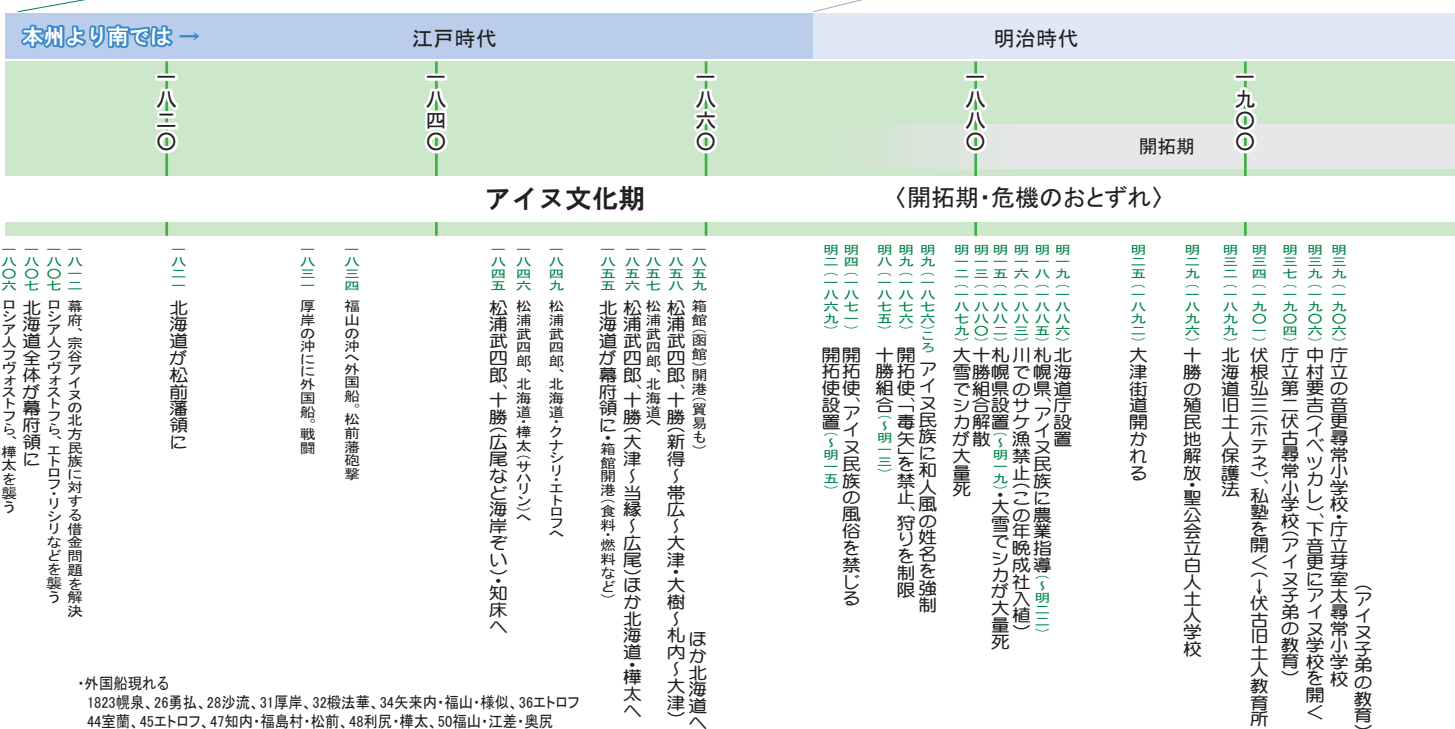
## 6千年前から今までの年表



## 11世紀(約1千年前)から今までの年表



## 19世紀から今までの年表



第1章 十勝の平野と川ができたのはいつ

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

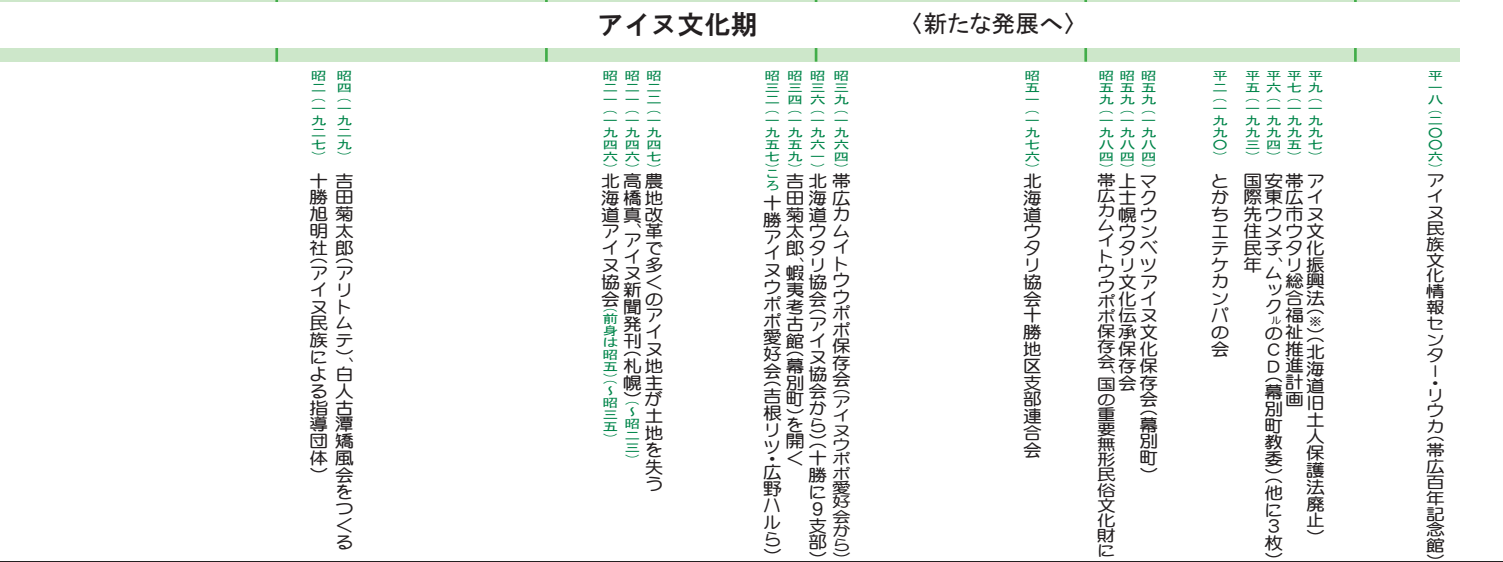
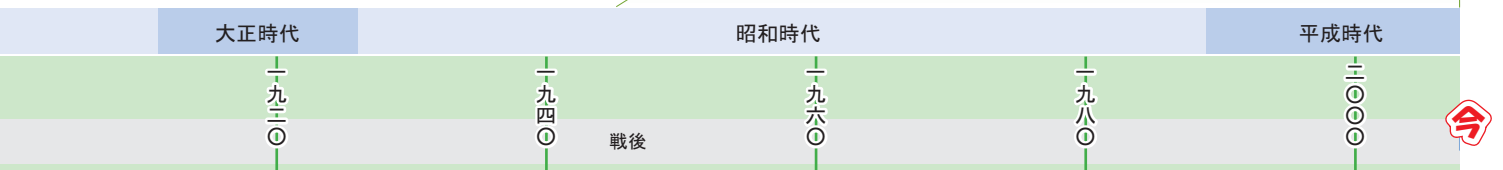
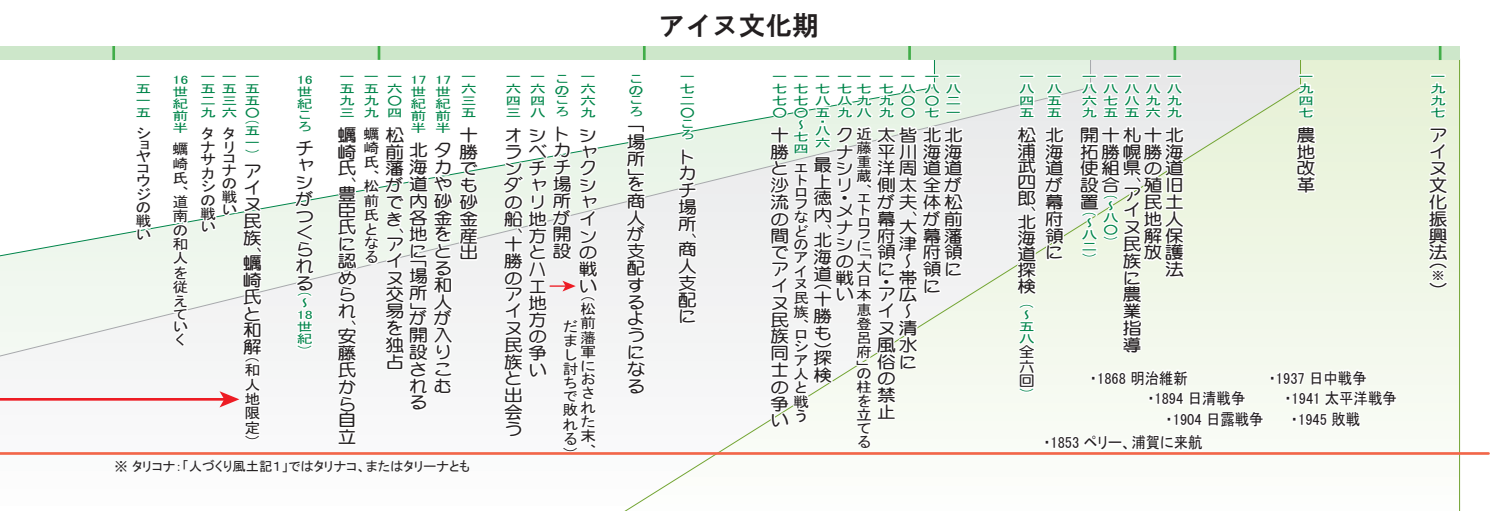
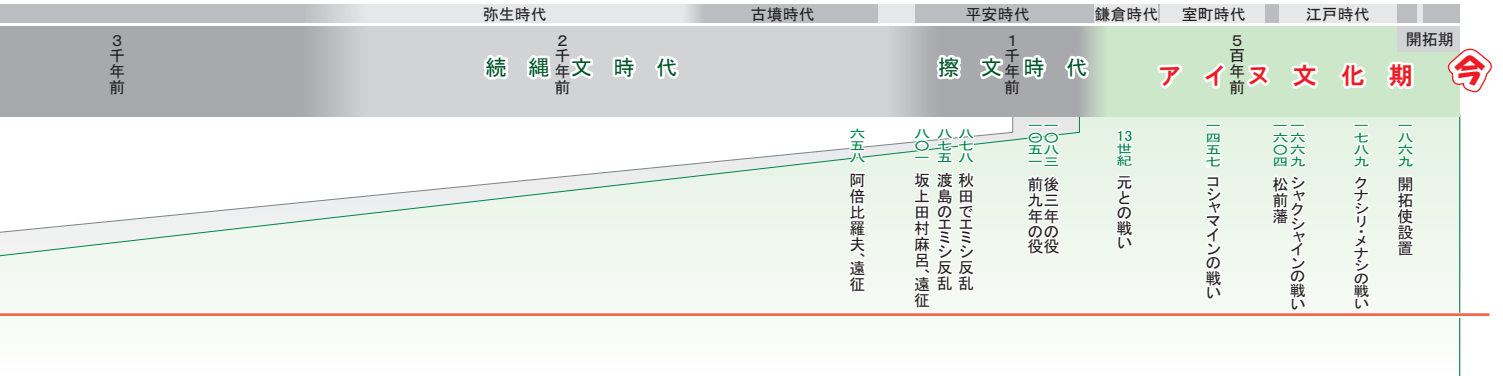
第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

アイヌ

とくに明治以前の歴史は、和人（または外国人）の記録がもとになっています。アイヌ民族からの見方とは異なる場合があることを、忘れないようにしましょう。



第1章 十勝の平野で川ができたまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語 さくいん

1937 日中戦争 1941 太平洋戦争 1945 敗戦 ※ アイヌ文化振興法: 正式名「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓蒙に関する法律」

はじめに 抄文～アイヌ文化と「大和」「元」… 本州や大陸とのかかわり

「桃太郎」の話を知っていますか？ この話は、鬼を「村人を苦しめた盗賊」と考えれば、財産を取り返しにいった正義の人の話ですが、鬼を「別の地域に住む、文化やすがたのちがう人」と考えると、宝に目がくらんで、人の暮らしをこわしたひどいやつの話、となります。

北地方北部支配の拠点を手に入れていきました。

● 北海道は「高級ブランド品」の原産地

抄文文化からアイヌ文化へと、北海道の文化が移り変わっていくころ、本州では平安時代から鎌倉時代へと変わっていきます。

このころの（これ以降も）貴族や豪族、武家にとって、北海道など北方でとれる「ワシ・タカの羽」や「アザラシの皮」などは、とても貴重なものでした。ワシ・タカの羽は矢羽に、アザラシの皮は乗馬につける「あおり」として用いられ、実用品として、それ以上に美しくかざりたてるための物として使われました。

今でいえば、超高級ブランドだったわけです。抄文～アイヌの人たちにとっては、これらは重要な交易品でした。

ワシ・タカの羽やアザラシ皮などをとって本州の人にわたし、かわりに鉄なべや刀など鉄の道具や陶器、うるしめりのおわんや杯、かざりとして使われた古銭（当時のコイン）や和鏡、朝鮮半島で作られた青銅の器などを受け取っていたのです。

アイヌ文化が成り立っていく上で、これら本州からやってきたものは、生活の中で、あるいは祈りや祭りの場で、大きな役割を果たしていきます。

一方で「北のブランド品」は、それを手に入れた人や本州の中心地へ送る人たちにとって、とても自慢できるものであり、大変「もうかる」ものでした。となれば、何とか安く、たくさん手に入れて、さらに大もうけをしたいと考える人もでてきます。

人にはあつかわず、自分だけで商売し、北海道の人をごまかせば、いくらでももうけることができます。そのために、争いが起き、大きな悲劇が起こることになります。

● 東北地方での争い

抄文時代半ば過ぎの11世紀ころ（平安時代後期）、東北地方の北部（岩手県北部や秋田県北部と青森県）に暮らしていた人々の中には、伝統的な暮らしを続ける人のほかに、大和文化の人（和人）のように暮らす人、また豪族・武家となって「領地」を持つ人がいました。

このころ、大和中央による東北地方の支配はあまり強くありません。豪族たちは、ある程度独立した支配と争いをおこないました。豪族には岩手・青森を支配する安倍氏、秋田を支配

● 東北地方にせめこむ大和（日本）

7世紀、抄文文化（→p 102）ができてきたころ、本州中部では「大和の改新」があり、大和朝廷を中心とする「大和の国（日本）」が大きくなっていきます。この大和の人たちは、支配できていない東北地方あたりから北の地域や人々を「エミシ」と呼んでいたようです。

大和朝廷は大和の国を発展させていくために、大和に従わない人たちである「エミシ」やその土地を支配しようとしています。そのため、軍隊も送りこまれました。

7世紀の中ごろには、湊足柵（新潟市付近）や磐舟柵（新潟県村上市付近）などの城柵（支配拠点）が置かれ、また、阿倍比羅夫が水軍を率いて、東北地方の（さらには北海道の？）「エミシ」と戦っています。

8世紀には、多賀城（宮城県多賀城市）、桃生城（宮城県石巻市）などの城柵が宮城県北部にいくつもつくられます。

8世紀末（平安時代が始まるころ）には、大和朝廷は何度も軍隊を岩手県南部に送りますが、アテルイなどの指導者を持った「エミシ」軍は、これを何度も破りました。

大和朝廷軍は、坂上田村麻呂らを大将として軍隊を立て直し、またせめこみます。ついに802年、アテルイ軍は田村麻呂軍に敗れます。この時、田村麻呂は、胆沢城（岩手県奥州市）という城柵をつくりました。

翌803年、田村麻呂は志波城（岩手県盛岡市）をつくり、こうして、大和朝廷は東



7～9世紀につくられた東北地方の城柵。（『北日本の考古学』より、改変）

※1 城柵(じょうさく)：古代日本で、今の東北地方などのエミシを支配下に治め、殖民を進めるために設置された、柵や盛り土などで守りを固めた役所。「〇〇城」、「〇〇柵」と記録される。湊足柵については、環日本海貿易の交易拠点だという説もある。

※2 安藤氏(あんどうし)：津軽(つがる)地方を支配した武家・豪族で、室町時代には白羽(はく)秋田(あきた)郡(でわのくに)にあきた(く)までを支配した。室町時代中期以降は「安東氏」とされる例が多い。この本では「安藤」で統一する。

する清原氏<sup>きよはらし</sup>などがありました。そこへ、源氏<sup>げんじ</sup>が和朝<sup>やまとちよう</sup>廷の「国司<sup>こくし</sup>（地方支配役人）」としてかかわってきます。

これら三家の「支配<sup>しはい</sup>」への欲望<sup>よくぼう</sup>や「北の高級ブランド品<sup>よくぼう</sup>」への欲望、さらには兄弟間の争いなどがからまり、何度かの戦い（前九年の役・北奥合戦・後三年の役<sup>えき</sup>など）が起きます。

その結果<sup>いわたげん</sup>、岩手県南部の平泉<sup>ひらいづみ</sup>に、安倍氏<sup>あべし</sup>の血を引く「藤原氏<sup>ふじわらし</sup>」ができて、東北地方北部を支配し、北海道<sup>こうえき</sup>と交易することになります。

12世紀末、鎌倉幕府<sup>かまくらばくふ</sup>をつくった源頼朝<sup>みなもとのよりとち</sup>が平氏<sup>へいし</sup>に続いて藤原氏<sup>ふじわらし</sup>をほろぼし、征夷大將軍<sup>せいゐたいしやうぐん</sup>となります。13世紀、幕府<sup>ばくふ</sup>は津軽の豪族<sup>ごうぞく</sup>「安藤氏<sup>あんどうし</sup>」を「北の支配者<sup>せいはいしや</sup>」として登用し、安藤氏は東北と北海道の一部を支配します。

こうして、大和と東北地方の人たちが戦い、大和の文化が広がり、東北の人同士が争うなどする中で、大和の支配が東北地方全体へと広がっていきました。

● 擦文文化とアイヌ文化の人たち

12・13世紀ころまで続いた擦文文化ののち、北海道にはアイヌ文化が広がります。

擦文文化とアイヌ文化では、「土器を使う⇔使わない」、「竪穴式の家⇔平地式の家」、「家にかまどがある⇔かまどがない」、などといった、かなりはつきりしたちがいがあります。

では、擦文文化の人たちが北海道からいなくなり、新しくアイヌ文化の人たちが、どこからか入ってきたのでしょうか？

そうではなくて、擦文文化の人たちは、アイヌ文化の人たちの祖先だと考えられています。

さらにその前の続縄文文化（→p 100）にも、アイヌ文化とのつながり（例えば「スプーン」の先につけられたクマの彫像＝有珠モシリ遺跡）があるようです。

ただ、文化の移り変わりを教えてくれるような遺跡（→p 70）などがあまり見つかっておらず、どのようにアイヌ文化が成立していったかは、まだよくわかっていません。

● 「元」と戦ったアイヌ民族

13世紀初め、大陸ではモンゴル帝国<sup>ていこく</sup>ができ、やがて中国・朝鮮から西アジア<sup>ちゆうごく</sup>まで広く支配<sup>しはい</sup>しました。1271年、国名を「元」として、13世紀の後半には2度北九州<sup>しゆう</sup>にせめこみ、鎌倉幕府軍と戦いました（元寇<sup>げんこう</sup>）。

一方、アイヌ民族は、13世紀ころサハリン（かつて

の樺太<sup>からふと</sup>）にもやってきていました。交易品を手に入れることが目的だったようです。

これに対して、モンゴル<sup>げん</sup>（元）が軍隊を送りました。

こうして、1264年と1268年、アイヌ民族（津軽の豪族・安藤氏<sup>あんどうし</sup>が率いたともいわれる）はサハリンの地でモンゴル軍と戦い、敗れました。

この戦いは、安藤氏に対するアイヌ民族の不満につながったようです。1275年、アイヌ民族は安藤氏と争い、これをおさえようとした安藤氏の安藤五郎<sup>あんどうごろう</sup>が殺されます。

アイヌ民族と元は、さらに1284～1286年の3年間、サハリンで戦いました。1308年、アイヌ民族は元<sup>げん</sup>にみつぎ物<sup>つぎもの</sup>をすることで争いをやめました。



□ : モンゴル帝国勢力の最大の広がり。■ : 元。

一方、安藤氏に対するアイヌ民族の戦いは、今の青森県から秋田県などへ広がります。さらにこの戦いは、1320年ころからの安藤一族の内部対立（安藤氏の乱）へとつながります。

この安藤氏の乱を、鎌倉幕府はなかなかうまく収めることができず、最後は幕府軍も出動しましたが、それでもしずめることができません。1328年になって、ようやく戦いが終わりました。

九州での「元寇<sup>げんこう</sup>」は、武士たち（御家人<sup>ごけいじん</sup>）の生活を苦しめることになりました。また、戦いのあと、ほうびの土地をもらうこともできなかったため、御家人たちの幕府に対する不満は大きくなっていました。

そこへもってきて、なかなか安藤氏の乱を終わらすことができなかったため、鎌倉幕府はますます力を失い、1333年、ついにほろぼされました。

参考資料  
 「アイヌの歴史と文化 I」榎森進 編、2003  
 「アイヌの歴史と文化 II」榎森進 編、2004  
 「新 北海道の古代 2 続縄文・オホーツク文化」野村崇ほか編、2003  
 「新 北海道の古代 3 擦文・アイヌ文化」野村崇ほか編、2004  
 「北日本の考古学 南と北の地域性」日本考古学協会編、1994  
 「古代環日本海交通と渚足柵」武田佐知子、2005

※3 元寇(げんこう)：1274年の文永の役(ぶんえいのえき)と、1281年の(弘安の役(こうあんえき))。

※4 御家人(ごけいじん)：この場合、鎌倉幕府の将軍にしたがう武士のこと。将軍に土地を守られ、与えられる(御恩：ごおん)代わりに、鎌倉や京都の警護(けいご)、戦いの参加などの義務(ぎむ)(奉公：ほうこう)を負った。

第1章 十勝の平野で川ができた

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん

# 1. アイヌ文化の始まりとチャシ

## アイヌ文化の全体的な特色

地域産業  
国際理解

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展  
そして未来へ

用語

さくいん



伝統的な「コタン(集落)」のイメージ。

(帯広百年記念館蔵: 1)

12～13世紀ころを境にして、北海道に住む人たち(アイヌの人々)の文化は、それまでの「擦文文化」から大きく変わっていきます。これ以降の文化を「アイヌ文化」といいます。

自然の中での植物採集、魚とりや狩りを中心とし、かたわらでヒエやアワなどの農耕が行われる、という暮らしは、擦文時代の時と変わらず続きます。

しかし、縄文時代からおよそ1万年の間使われてきた「土器」( p83) がなくなっていき、煮炊きには鉄のなべが使われるようになりました。

鉄製品は、本州などから交易で手に入れ、そのまま使ったり、加工して作り直したりしました。

( 擦文時代 p102、 縄文時代 p84)



アイヌ文化では、床をほりこまずに壁を立ち上げた、平地式の家(チセ)がつくられた。上士幌町「東泉園」。(上士幌ウタリ文化伝承保存会)

### 床をほり下げない「平地式」の家

北海道の家については、地面をほり下げて床にする「竪穴式住居( p85) 」がつくられなくなります。

かわって、地面は平らなままで垂直な「壁」を立ち上げた「平地式住居」が作られるようになるのです。ちなみに、アイヌ語で家のことを「チセ」といいます。( p130)

また、擦文文化では作られていた「かまど」が作られず、家のまん中の炉になべをつり下げて、煮炊きをするようになりました。

### 交易の民

擦文文化以前にも、北海道以外の地域との交流があり、物や文化の行き来がありました。アイヌ文化ではさらに交易がさかんになり、アイヌ文化の内容にも大きな影響をあたえました。

本州やサハリン・大陸へは、コンブなどの水産物や動物の毛皮が送られ、本州からは鉄の道具やうるしぬりの器、木綿の布などが、大陸・サハリンからは絹や綿の服にガラス玉のかざりなどがやってきました。

また、北海道のアイヌ民族は、北の産物を本州へ、本州の産物を北へ送ると、「中継基地」の役割もはたしました。



ユクエピラチャシ跡(陸別町: p117)で見つかった中国銭「皇宋通宝」とガラス玉(身をかざるもの)。交易によって手に入れたもの。(陸別町教育委員会)

1 帯広百年記念館(おびひろひやくねんきねんかん): 帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155-24-5352 月曜日休館

2 竪穴式住居(たてあなしきじゅうきょ): 同じアイヌ文化でも、サハリンやウラル半島より北の千島列島では、竪穴式住居がつくられていた。



# アイヌ文化期の自然のようす

環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



今の十勝の林。かつては、今よりもはるかに太い木が、はるかに深い森をつくっていた。今ある林のほとんどは、一度切り開かれている。

アイヌ文化が広がったころの自然は、明治になって内陸開発が始まったころと、ほぼ同じすがたをしていました。今では開発が進み、十勝のほとんどの場所で、もとのすがたを見ることができなくなりました。

石狩山地や日高山脈に囲まれた十勝平野の台地には、カシワやミズナラを中心とした広葉樹の大木が、大森林をつくっていました。森の地面には、落ち葉が重なって土にかえり、さまざまな草が育ちます。

積雪が少ないことから、エゾシカが冬をこすため、群れをなしてやってきたといえます。( p145 )

川岸の肥えた土には、ハルニレ、ヤチダモ、キハダ、オニグルミといった木々が深い森をつくり、シマリス、タヌキやフクロウなど多くの動物が暮らしていました。



(上)人の手がほとんど入っていない十勝川中流(明治29年発行の地形図・着色)。(下)最近の同じ場所(平成12年発行の地形図)。

## 曲がりくねり分かれる川

今では、川は堤防の間をほとんど1本の川すじで流れていますが、これは人が作り上げた形です。

もともと、平野を流れる川は、両側にある丘(段丘)の間を大きく曲がりくねり、あるいは何本にも分かれていました。

大きな洪水があれば、湖のようになることもあり、それまでとはちがった流れにもなりました。そんな時には、草木も流されますが、洪水が引いたあとには肥えた土が残され、新しく豊かな林をつくる土台となりました。

十勝川下流の平地には湿原が広がり、春になると本州で冬をこしたタンチョウがきて、子育てをしていたことでしょう。

(地図は国土地理院所蔵・刊行の1/5万地形図(止若・十勝池田)を使用。70%に縮尺)

## 川にあふれるサケやイトウの群れ

曲がりくねる川には、深いところや浅いところ、流れの速いところやおそいところなど、いろいろな状態ができます。また、森が岸をおおう川には、落ち葉や虫が落ちることでエサがたくさんあります。

アイヌ文化が広がったころの川には、さまざまな魚がたくさん生きていました。春にはそれまで深い川底にいた大型のイトウが、卵を産むために上流の浅瀬へ向かいます。中には1mを軽くこえるものもいました。

また、秋には海で大きく育ったサケが、きれいなわき水の出る場所をめがけて、産卵しにやってきます。かなりの数だったようで、「かつては、小さな川では棒がたおれないほどだった」という話も伝わっています。



川をさかのぼるサケ(猿別川・幕別町)。

1 広葉樹(こうようじゅ): カシワやカエデなど、広くて平たい葉をもつ樹木。北海道の自然林の広葉樹は、冬になると葉がかれ落ちる「落葉広葉樹(らくようこうようじゅ)」。  
2 多くの動物(おおくのどうぶつ): エゾオオカミやニホンカウソウなど、今では絶め

つした動物もいる。  
3 ささまざまな魚(...さかな): チョウザメは昭和時代に十勝からすがたを消した。( p93 )  
4 アイヌ語で自然と出会う: 参考図書「アイヌ語で自然かんさつ図鑑(帯広百年記念



## アイヌ語で自然と出会おう... 身近な存在としての自然

多くの生き物にアイヌ語名がついていて、人とのかわりが深いものには、とくにくわしくついています。

植物でいえば、食べものとなるギョウジャニンニクは「ブクサ」、オオウバユリは「トゥレフ」、また狩りの時、矢の先にその強い毒をぬったトリカブトは「スルク」といいます。

動物では、食べものや毛皮をくれるエゾシカは「ユク」、キタキツネは「チロンノフ」(私たちがたくさん殺すもの)といい、大きくて強いヒグマは「キムンカムイ」(山の神)と呼ばれていました。

川の魚では、サケのことは「カムイチェフ」、つまり「神の魚」といい、これも大切な食べものであるイトウは「チライ」といっていました。(魚の名 p119)

フクジュソウは、十勝では「チライムン」といいますが、これは「イトウの草」という意味です。春先、フクジュソウが花を開くとイトウが川をさかのぼってくるので、漁を始める合図としていたのです。

上士幌町の「東泉園 ( p120・p129・p131)」では、上士幌ウタリ文化伝承保存会の人たちが、十勝のアイヌ民族が利用してきた植物を育て「アイヌ植物園」をつくっています。

大雨による土砂くずれにあうなど、多くの苦勞をしながらつくり続けられている、とても貴重な場所です。



「トウレフ」 オオウバユリ。



「チロンノフ」 キタキツネ。



「チライ」 イトウ。  
(飼育: 幕別町ふるさと館: 5)



「チライムン」 フクジュソウ。



「アイヌ語で自然かんさつ」。帯広ひゃくねんきねんかん百年記念館 (6) による観覧会。  
(十勝千年の森・清水町羽帯)



「東泉園」(上士幌町)の「アイヌ植物園」。

注: この本では基本的に十勝地方のアイヌ語名を紹介しています(他のページでも)

## 目で見る自然の大変化... 植生図でくらべる十勝

右の2つの図は、どんな植物が生えているかで色分けをした「植生図」です。

左側は、もし人が自然を変えなかったらどうだったか、という図で、右側は今のようすです。

小さくしているので細かい分け方はわかりませんが、それでも、今の図では、オレンジ色が目立つことがわかります。ここは、畑になったところす。

また、緑色の部分も、よく見れば色が変わっています。さらに、同じ色のままでも、木の太さや生え方が大きく変わっていることがあります。



潜在自然植生図。もし、人が手を加えなかったら、という植生図。



現存植生図。今のようすはどうか、という植生図。

「北海道現存植生図(日本植生誌 北海道)」宮脇昭・奥田重俊、国土地図、至文堂、1988

「北海道潜在自然植生図(日本植生誌 北海道)」宮脇昭・藤原一絵・中村幸人・大野啓一・村上雄秀・鈴木伸一、国土地図、至文堂、1988

館)=十勝のアイヌ語名をのせている。「アイヌ植物誌(福岡イト子)」=十勝の名前とは異なることもあるが、利用法、伝説、著者の体験など、とても興味深い内容。  
5 幕別町ふるさと館(まくべつちょうふるさとかん): 幕別町依田384-3(依田公園横)

電話 0155-56-3117 月・火曜日休館  
6 帯広百年記念館(おびひろひゃくねんきねんかん): 帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155-24-5352 月曜日休館

# 川を見下ろす「チャシ」



ユクエビラチャシ跡(陸別町)のある高台。下を流れるのが利別川。

16～18世紀ころ、見晴らしのいい高台の上に「チャシ」が作られました。

チャシとは、高台の地面に1本から数本のみぞ(壕)がめぐらしてあるところで、使われていた時には柵で囲まれていたようです。

何のためにつくられたのかは、はっきりしていませんが、伝説によると、アイヌ民族同士や和人との戦いのための砦、あるいはカムイ(神 p 134)が舞い遊ぶ場所、見張りのための場所、争いを収めるための話し合い(チャランケ)の場所などに使われたと伝えられているようです。狩りのためではないかという考えもあります。

第1章 十勝の平野や川ができるまで  
第2章 先史時代と川  
第3章 アイヌ文化と川  
第4章 十勝開拓と川  
第5章 発展、そして未来へ  
用語 さくいん



## 十勝のチャシ

チャシは、日高地方より東の太平洋側の地方に多くあり、十勝では72カ所のチャシのあと(チャシコッ)が見つかっています。

十勝のチャシのあとは、海ぞいにも何カ所ありますが、そのほとんどが川ぞいの高台にあります。

十勝川と利別川(とその支流)で多く見られ、一方、音更川には4カ所だけ、札内川では全く見つかりません。



また、十勝川では芽室町より下流部に多く見つかりますが、利別川では、中流～上流部の本別町・足寄町・陸別町で見られます。

十勝川温泉チャシ跡(音更町)。十勝川ぞいの十勝エコロジーパークにつき出ている。

## 本別町「シンコチャシ」の伝説

『このチャシはとても見晴らしがよく、この地に侵入する者は、すがたをさらさなければならなかった。』

ある夏の日、利別川の上流から、フキの葉がたくさん流れてきた。実は、釧路の戦士たちがフキの茎(つつになっている)をくわえて呼吸しながら水中にもぐり、本別の人たちのウラをかこうとしたのである。

しかし、本別の首長はこれを見破った。ウラをかいたつもりの釧路の戦士たちは、逆に本別の人々に待ちぶせされ、囲まれ、一人を残して全めつしたという』

(本別・清川ネウサルモンさんの話 = 目黒治助氏記録)

= 『改訂増補 アイヌ伝承と砦』より、意識・改変)



シンコチャシ跡(本別町)のある丘。下を流れているのは利別川。

1 72カ所のチャシのあと：北海道教育委員会に登録されている数。すでに完全にこわされていたり、伝承などはあっても場所が確認できなかったりするものをふくめると、およそ80カ所となる。

2 チャシコッ：「チャシのあと」という意味で、地名にもなっている。豊頃町にある安骨(あんこつ)は、もとは「チャシコッ」に当てられた文字だったのが、あとで読み方が変わったもの。もちろん安骨にもチャシ跡があり、「安骨チャシ跡」という。ただし、

としべつがわ

## 利別川が見わたせる高台 ... 陸別のユクエピラチャシ跡(国指定の史跡)

りくべつちょう

陸別町の高台には「ユクエピラチャシ」のあとがあります。16世紀中ごろつくられたと考えられています。

としべつがわ

利別川を見下ろすガケの上に、みぞ(壕)がかなり深くほってあります。みぞに囲まれた場所(郭)が3カ所あります。

今でもかなり広いチャシあとなのですが、もともとチャシがつくられた時には、今ほどガケがくずれておらず、もっと川の方に広がっていました。

当時としては、大きな工事だったようです。

また、みぞをほった時に出土した大量の土は、みぞの外側に盛られていました。

盛られた土の一番上には、白い火山灰

が積まれています。できた当時には、チャシの外側がはば広く(18m以上)白くなっていて、かなり美しいチャシだったことでしょう。

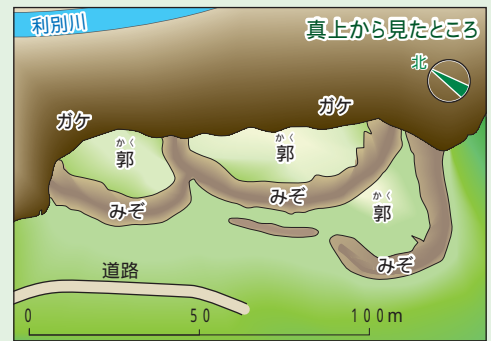
「ユクエピラ」とは、「シカ・食べる・ガケ」の意味です。発掘調査では、多くのシカ(アイヌ語で「ユク」)の骨が見つかっています。



ユクエピラチャシ跡。公園整備がおこなわれている。みぞやガケでケガをしないように。



ユクエピラチャシ跡の位置。  
陸別町字トマム2番地2



ユクエピラチャシ跡を上から見た図。  
(参考:「史跡ユクエピラチャシ跡発掘調査概要報告書」)

### ていねいにつくられたチャシ ... ユクエピラチャシの特ちょう



ユクエピラチャシ跡から見下ろす利別川。



盛った土の断面。色ちがいの火山灰が交互に積まれている。

(写真:陸別町教育委員会蔵)

としべつがわ

### 利別川を見下ろそう

昔とは流れが変わっていますが、今でも利別川を見下ろすことができます。サケなどがのぼってきた時、あるいは、よその人(敵かも知れない)がやってきた時、すぐわかる場所だったようです。(ガケに近づきすぎないように)

### かなりの手間がかけられている

土を盛ったところを調べてみると、白色とオレンジ色の火山灰がたがいちがいに積み重ねてありました。かなり計画的に、手間をかけてつくられています。

### たくさんのシカ(ユク)の骨

たくさん見つかったシカの骨は、単なるゴミとして捨てられたわけではありません。自然のめぐみはカムイ(神:p134)からいただいたものです。アイヌの人たちは、カムイへの感謝と願いをこめて、その霊をカムイの国に返すという気持ちを持っていたのです。(「捨てる場所」p94)

もともとの意味からすると「安骨チャシ跡」だと「チャシ跡・チャシ跡」となってしまう。

3 火山灰(かざんばい):火山からふき出したもので、マグマ(地下にあるとけた岩石)が粉々にくだけたもの。木や紙などが燃えてできる灰とは異なる。地質学では直径2mm~1/64mmのものをいう。どの火山のいつのものかによってちがいがある。(p58~61)

## 2. 伝統的な暮らし

地域産業  
環境

第1章 十勝の平野や  
川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、  
そして未来へ

用語

さくいん

### 川で食べ物をとる

伝統的なアイヌ文化では、ヒエやアワなどの畑も作られていましたが、基本的には自然の中で、植物採集・魚とり・狩りなどをする事によって食べ物を得ていました。

内陸に住む人たちにとって、飲み水が手に入り、魚（チェフ）がとれる川は、とても大切なところでした。

秋、海から産卵のためにのぼってくるサケ（カムイチェフ）やアメマス（ツクツクシシ） 春に下流から上流へやってくるイトウ（チライ） そのほかヤマメ（イコイチャンコロチェフポ）やウグイ（オツワッキ）そして今では見られなくなったチョウザメ（ユベ）（ p 93）など、豊かな川は命を支えてくれたのです。

そのため、アイヌの人たちにとって、川は「カムイ（神）（ p 134）」でした。



川では魚だけでなくワシりょうもおこなわれた。丸木に生きた魚を結びつけておき、エサをとりに来たワシをつかまえる。（『蝦夷島奇観』より 帯広百年記念館蔵： 2）

#### 「マレク」モリとカギを合わせたすぐれもの

サケやマスをとる道具に「マレク」というものがあります。20cmくらいのカギ（大きな釣り針のようなもの）を、ひもなどで台木に取りつけたものです。

このマレクを2～3mほどの柄の先に取りつけます。

使い方はモリといっしょで、泳ぐ魚に向かってつきさします。すると、カギが台木からはずれて、魚はひもでぶら

下がります。魚の重みでカギが上向きにくいこむので、あばれてもはずれません。（ p 120）



マレクによる漁。子どもがたいまつをかざしている。

（平澤屏山『蝦夷人マレップにて鮭を捕る図』〔 3〕 函館市中央図書館蔵） マレク。（帯広百年記念館）



#### 「矢」で小魚をとる

「ペラアイ」という矢を使って小さめの魚をとることもありました。

ただし、ペラアイにはつきささる「ヤジリ」ではなく、平たい木の板のようなものがつけられています。

水中の魚に向かって小型の弓で射て、命中すると魚がうかんでくるのです。



ペラアイ。右の板の部分が前で、魚に当てる場所。（帯広百年記念館）

1 産卵（さんらん）：こういう場合は、メスが卵を産むことと、オスが卵に放精（ほうせい）：精子をかけること）を合わせていっている。

2 帯広百年記念館（おびひろひやくねんきねんかん）：帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155

- 24 - 5352 月曜日休館

3 平澤屏山（ひらさわびょうざん；1822～76）：幕末の画家。十勝・日高地方に滞在し、アイヌ民族の暮らしに直接ふれて絵を描いたといわれる。「マレップ（マレフ）」とは、「マ

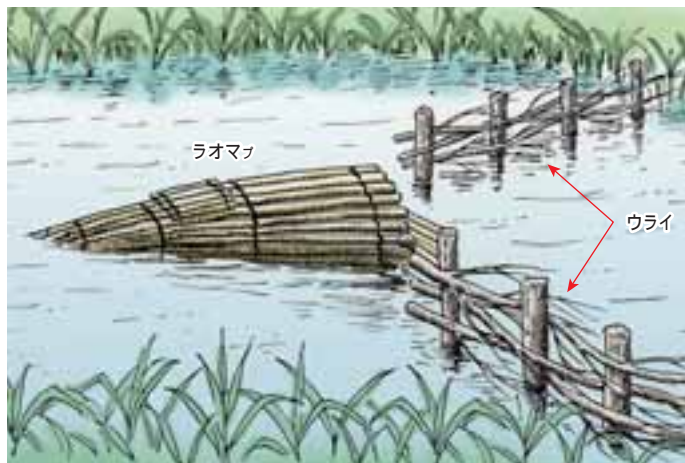
## 魚をとるためのしかけ 「ウライ」

「ウライ」は川はばのせまい小川に、V字形に何本かのクイをうち、これにヤナギの枝などをからませたものです。「V」の先に、魚が入ったらにげられない「ラオマフ(どう)」をしかけておいて魚をとります。

魚がのぼる時・下る時に合わせて「V」の向きを変えました。



現在、人工ふ化( p236)のために猿別川でサケをつかまえるしかけも「ウライ」と呼ばれる。ただし、かなりの大きさと、V字形ではない。



ウライと、その一番おくにしかけられたラオマフ。(参考:『北海道の自然と暮らし』)



テシによる漁。タモ網ですくい取っている。

(平澤屏山『蝦夷人川魚を捕る図』 函館市中央図書館蔵)

## 魚をとるためのしかけ 「テシ」

「テシ」は、川はばの方向にまっすぐ何本もくいを立て、そこにヤナギの枝を編んだものをはりつけたしかけです。テシで行き場を失った魚を、網やマレク、あるいは魚がふれると網が自動的に持ち上がって魚をとるしかけなどで、とりました。

また、2そうの丸木舟(チフ)の間にふくろ状の網を張り、上流から魚を追いこんでつかまえる「ヤス」漁も行われました。

## 「シシャモ」は「スサム」から ... 川魚のアイヌ語名

川魚のアイヌ語名を紹介します。

- ・サケ：カムイチェフ
- ・イトウ：チライ
- ・サクラマス：イチャニウ  
ヤマメ：イコイチャンコロチェフボ
- ・ヒメマス：カパツェフ
- ・オショロコマ：チポロケソ
- ・ウグイ：オツワッキ  
産卵期のウグイ(アカハラ)：スブン
- ・ハナカジカ：パケポロ
- ・ドジョウ：チチラカン
- ・フナ：ランパラ
- ・シシャモ：スサム(スス・ハム[ヤナギの葉]から)
- ・ヤツメウナギ：ウクリベ

「シシャモ」という名前は、「スサム」というアイヌ語名からきています。また「オショロコマ」は、別の地方でのアイヌ語名「オソルコマ」からできた名前です。

ヒメマスのことを、北海道で「チップ」ということがあります。これはアイヌ語の「チェフ=魚」を聞きちがえたものです。チップ(チフ)では舟のことになってしまいます。

ここにあげた魚は、ほとんどが食用とされましたが、ヤツメウナギはちがいます。

ヤツメウナギは干して軒先につるし、病気を寄せつけないための「おまじない」として使いました。

レク」の別の地方での呼び名。

## マレクでサケをとろう ... 上士幌町東泉園での体験

上士幌町の「東泉園」では、上士幌ウタリ文化伝承保存会の人たちが（アイヌも和人も力を合わせて）十勝のアイヌ文化を伝えていく場所づくりをしています。

秋には、生きたサケ（カムイチェブ）を東泉園の池に放して、だれでもマレク漁を体験することができる「マレク（マレク）漁の集い」が開かれます（北海道ウタリ協会上士幌支部）。

池の中ではあっても、泳ぐサケをつくことはかんたんではありません。「来た!」と思ってついても、サケはすでに泳ぎ去っていたり、身をかわしたりしています。息を整え、集中力を高め、サケの動きを読み、正確にマレクをつき出さなければなりません。

人によっては何度も何度もチャレンジしなければとれないこともあります。それだけに、とれた時には大きな喜びが得られます。

マレクにかかったサケを持ち上げる時、サケの「命の重み」をきくと感じられることでしょう。



「マレク漁の集い」。丸木舟(チブ)に乗って、池に放されたサケをマレクでつこうとする子どもたち。(上士幌町・東泉園)



東泉園の位置。上士幌町字上音更。



カギにささったサケは、マレクにぶら下がり、重みではずれない。(上士幌町・東泉園)

### マレク ... 体験のポイント



「かえし」のあるカギ。  
(幕別町蝦夷文化考古館: 1)



「かえし」のないカギ。  
(帯広百年記念館: 2)



「マレク漁の集い」でおこなわれるカムイノミ。(上士幌町・東泉園)

#### カギには「かえし」がなくてもよい

ふつう、釣り針には「かえし」といって、ささったあと、ぬけないようなしくみがありますが、マレクのカギには、かえしがなくともいいのです。(ただし、十勝のマレクのカギにはかえしがあるものも見られます)

サケにささった時、カギがはずれてひもでぶらさがります。持ち上げる時、このカギがうまく上向きになるため、サケの重みではずれないのです。

かえしがなければサケを取りはずしやすいので、すぐ、次のサケをねらうことができます。

#### カムイへの祈りから

伝統的なアイヌ文化では、その年のサケ漁を始める時に、「アシリ・チェブ・ノミ（新しいサケをむかえる神への祈り）」をします。東泉園でも、マレク漁を始める前に、祈りの儀式（カムイノミ）がおこなわれます。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん

1 幕別町蝦夷文化考古館（まくべつちようえぞぶんこうこかん）：幕別町字千住 114 - 1 電話：0155 - 56 - 4899 火曜日休館（p150）

2 帯広百年記念館（おびひろひゃくねんきねんかん）：帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155 - 24 - 5352 月曜日休館

## 魚以外の食べものをとる ... 植物、そして動物

アイヌ文化では、魚以外にもさまざまな自然のめぐみを得ています。その一部を紹介します。

### 食べていた植物

野草の中で、今でも山菜として人気の高いギョウジャニンニクは「ブクサ」と呼ばれ、とても大切な食べ物でした。

あるいは、オオウバユリは「トゥレブ」と呼ばれ、その鱗茎（球根のようなもの）からでんぷんをとり、また、保存食として「トゥレブアカム」を作りました。



オオウバユリ(トゥレブ)の花と、その鱗茎のせんいで作られた保存食「トゥレブアカム(帯広百年記念館：2)」。

また、コウライテンナンショウ（ラウラウ）の地下茎には毒があるのですが、ある時期になるとその毒が一部に集まるのでその部分だけを取り除き、残りを食用としたといいます。

秋や春先には、ヤブマメ（エハ）の地下にできる豆をほり集めました。

沼では秋に、水面にうかぶ水草のヒシ（ペカンベ）の実をとりました。



ヒシ(ペカンベ)の実を沼で集める。円内がヒシの実(右は皮をむいたもの)。

### 伝統的な狩り

シカ（ユク）は大きく、とくに冬には群れで行動するのでとても大切なえものでした。

動物は食べ物としてだけでなく、その皮、角、骨を道具などの材料として利用できます。

さらに、毛皮や角は和人と交易商品としても重要なもので、これによって木綿の布や鉄器、うるしぬりの器など、アイヌ文化にとって大きな意味をもつ本州の産物を手に入れることができました。

狩りは弓矢やヤリ、あるいはさまざまなワナやしかけによっておこなわれていました。

弓矢による狩りでは、トリカブト（スルク）という草の根の毒をヤジリ（矢の先）にぬっていました。この毒は何種類かあるトリカブトをどのように混ぜ、ほかに何を入れるのかによってききめがちがい、他人には知られないようにしていたといいます。



冬の狩り。(写真:木下清蔵写真資料より 財団法人 アイヌ民族博物館蔵) 円内はトリカブト(スルク)の花。根から毒をとる。

狩りは一人でやる場合もありましたが、何人がチームを組み、指示する人、追いこむ人、しとめる人、と役割を分担しておこなう場合もありました。

ワナには、ひもに動物がさわるとトメがはずれて矢が発射される「アマツポ」というしかけ弓があります。

そのほか、エサをとろうとすると重しが落ちるしかけ、エサをとるためにジャンプすると首が引っかかるような木の又を利用したしかけ、通り道に輪を作っておいて走りぬけようとした動物をとるしかけなどがありました。



復元された、しかけ弓「アマツポ」。(上士幌町・東泉園)

# サケを使った料理

環境

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん



サケを使ったアイヌ料理。上左チェフオハウ、上右チタタフ。下左チボロウシイモ、下右チボロシト。つくり方は次のページから。

川をのぼってくるサケは、伝統的なアイヌ文化の中で、大切なタンパク源<sup>たんぱくげん</sup>でした。

なんととっても秋になれば、必ず群れをなして川をさかのぼってくるのです。自然のめぐみ、川のめぐみとしてとても大切な生きものでした。アイヌ語では「カムイチェブ(神の魚)」と呼ばれます。(カムイ p134)

伝統的なアイヌ文化では、魚肉だけでなく、内臓やヒレを食べ、あるいは皮を使って雪ぐつ(チェブケリ)を作るなど、そのほとんどすべてを役に立てていました。

また、とってすぐ食べるだけではなく、干したりこおらせたりして保存食<sup>ぼんじょく</sup>としたり、卵<sup>たまご</sup>(いわゆるイクラ：アイヌ語でチポロ)を調味料のように使ったりするなど一年を通して食べられていて、とくに冬をこすためには、なくてはならない食料でした。



(上)サケの学習会で、イパキクニを体験する子ども。(写真:財)十勝エコロジーパーク財団)



(右)イナウ。祈りをカムイ(神)に届ける。

## 敬意をこめて「送る」

サケは網やマレクなどでとったあと、30cmくらいの「イパキクニ」と呼ばれる木の棒で頭をたたいて殺します。

これは、サケを傷めず殺せる便利な道具なのですが、それだけではありません。イパキクニは、カムイ(神)への敬意をこめる「イナウ」という祈りの道具と同じだと考えられています。

つまり、自分たちの命や生活を支えてくれるサケを殺すのは、ただ殺すのではなく、感謝の気持ちを持っていねいにあつがい、その霊をカムイの国(カムイモシリ)へ「送る」のだということなのです。(カムイ p134)

## とったサケは...

とったサケは、すぐ料理して食べもしましたが、ほとんどは冬の間(やその先)のためにとっておきます。内臓をとり、背割りにして二枚におろし、日の光で干したあと家の中の炉だなにつり下げ、炉の火のけむりでくんせい<sup>くんせい</sup>にしました。干し魚のことをアイヌ語で「サッチェブ(かわく・魚)」といいます。

今でいえば、「トバ」や「スモークサーモン」のようなものです。

そのほか、冬の寒さを利用することで、「ルイペ」という料理もつくられました(123 ページ)。



おろしたサケを干すイメージ。右は、今売られている「トバ」。



1 イクラ：一つぶずつにされたサケやマスの卵。もとはロシア語( )で「魚の卵」の意味。  
2 炉だな(ろだな・炉棚): 炉(ろ: 3)の上に天井からつるされた、すきまのあるたな。

ものをおろすのに使う。( p130 写真)  
3 炉(ろ): 床のまん中につくられた火をたくところ。料理や暖ほう用。( p130 写真)  
4 くんせい(燻製): 肉や魚などをけむりでいぶすことで、長もちさせること。風味づ



## サケ料理 ... サケの身をおろす

ここでは、伝統的なサケのアイヌ料理を紹介します。  
 ムックルの演奏者としても有名で、平成 16 年(2004) おしくも亡くなられた幕別町の安東ウメ子さんが、生前紹介されていた料理です。(参考:『ポンカンピソシ3』)  
 サケの身はもちろん、白子やヒレを使う料理もあります。スーパーなどで手に入る材料で作ることのできるものもあります。

まずは、まるのままのサケをおろす時の手順です。

全体に塩をまぶしてぬめりをとる

頭をとる(捨てない)

腹に包丁を入れ、内臓をとる(捨てない)

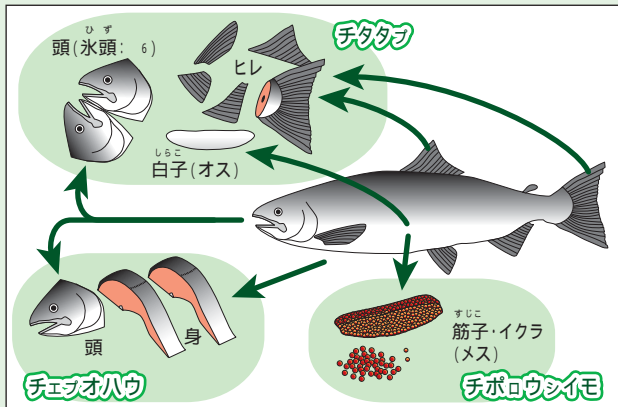
ヒレを落とす(捨てない)

三枚におろして、しばらくの間水分をきる

筋子は塩をふり、一晩冷蔵庫でねかせる

ねかせた筋子をほぐして、イクラにする

この本では紹介していませんが、背骨にそってついている血合い(背わた・腎臓:ファイペ)も利用されます。いわゆる「メフン」です。



おろしたサケの部分ごとの料理法。(『ポンカンピソシ3』より、改変)



サケをおろす。(写真:(財)十勝エコロジーパーク財団)

## 「ルイペ (ルイベ)」のあれこれ ... こおらす食べもの、とかす食べもの

今、料理店などで出される「ルイペ」は、こおらせたサケ(カムイチェブ)の刺身料理です。冷たくこおったサケの身を口に入れ、食感と冷たさを楽しむうち、少しずつとけて味わいが広がります。

サケの身にはアニサキスという寄生虫がいるため、こおらすことで、これを殺すという意味もあります。

ルイペということばは、アイヌ語の「ルイペ」から来ています。しかし、「ル」が「とける」、「イペ」が「食べもの」で、「とけた食べもの」という意味です。「こおった食べもの」ではないのです。こおらすだけでなく、とかすところにポイントがあったようです。

ただ、同じ「ルイペ」でも、地方や人によって異なった食べものを指す場合があります。

サケを寒い時期にまるごと軒下にぶら下げるなどしてこおらせ、その切り身を炉の火であぶり、焼けたところから食べていくのがルイペだ、という人がいる一方、あるところでは、晩秋にとったサケを干して水分をぬき、その後さらに、こおったりとけたりをくり返させながら

干していったものだ、といます。

また、ルイペはサケだけでなく、シシャモ(スサム)などほかの魚でもつくられました。釧路川では、のぼってきたシシャモを河口でつかまえて、雪の中にくらめておくことでルイペにしたといます。

いずれにしても、ルイペは寒さがきびしい北海道ならではの、そして魚と深くかかわったアイヌ文化ならではの保存法・料理法であったのでしょう。



釧路川河口(釧路市)で、シシャモのルイペづくりをしているところ。(西川北洋『アイヌ風俗図巻』より 函館市中央図書館蔵)

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん

けにもおこなわれる。  
 5 筋子(すじこ): スジのような膜(まく)で、サケやマスの卵がたくさんつながったままのもの。腹の中から取りだしたままの形。これをつぶすバラしたものがイクラ。

6 氷頭(ひず): サケの頭(鼻の上)にある軟骨(なんこつ)。半透明(はんとうめい)で、かたくなく、やわらかくもなくコリコリしている。

## サケ料理 ... チェブ・オハウ

「チェブ・オハウ（魚・汁）」は、サケのなべ物で、いわば三平汁のようなものです。

材料：サケの身、ジャガイモ、ニンジン、タマネギ、長ネギ、大根、塩

サケの身を適当な大きさに切る（切り身）  
 野菜類（昔は山菜）を適当な大きさに切ってナベに入れる  
 野菜類が少し煮えたところで、サケの切り身を入れる  
 具が煮えたら塩で味を整える（昔はかなりうすい味でした）  
 仕上げに長ネギを入れる

頭などアラをいっしょに煮たり、季節の山菜をためしたりしてもいいでしょう。



チェブオハウの  
できあがり。

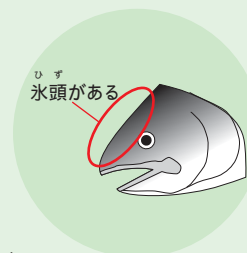
## サケ料理 ... チタタフ

「チタタフ（私たち・細切れにたたく・もの）」は、新鮮なサケを使った、秋を代表する料理です。

材料：サケの背ビレ、尾ビレ、腹ビレ、氷頭、白子、長ネギ、塩  
 （氷頭とは、サケの頭〔鼻の上〕の軟骨のこと。半透明でコリコリしている）

背ビレ、尾ビレ、腹ビレ、氷頭のぬめりを塩でとる。  
 それらを包丁で、細くなるまできざむ  
 長ネギをきざむ  
 にと白子と塩を少量混ぜるようにして、さらにきざむ

昔は長ネギではなく、ギョウジャニンニク（ブクサ）を使いました。



チタタフの  
できあがり。

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん

1 三平汁（さんぺいじゅう）：北海道の郷土色豊かな名物料理。昆布でだしをとり、塩サケなどの魚、だいこん、ニンジン、玉ねぎ他を入れて、しっかりあくをとって煮こむ。味つけには、塩の他、酒かす、みそなどを使うこともある。

## サケ料理 ... チポロウシイモ

「チポロウシイモ（イクラ・たくさん混ざった・ジャガイモ）」は、イクラ（チポロ）を使ったジャガイモ料理です。

材料：イクラ、ジャガイモ、塩

ジャガイモを塩ゆでする  
ゆであがったジャガイモをつぶして冷ます  
の中にイクラを入れ、ジャガイモごとすりこぎ棒などでつぶす  
イクラがつぶれて、ジャガイモにきれいな色がついたらできあがり

新鮮なイクラをうまく処理しないと、生ぐさくなることもあります。

焼いたジャガイモだんごに、つぶしたイクラをまぶして作る「チポロシト」もあります。



ジャガイモだんごに、つぶしたイクラをまぶす「チポロシト」

チポロウシイモのできあがり。

## サケ皮のくつ「チェブケリ」... 食べもの以外の利用法

サケは食べるほかに、皮を使って冬用のくつ（チェブケリ＝魚のくつ）を作るためにも利用されました。

片方のくつを作るのにサケ2尾ぶんの皮を、つまり、1足作るのに4尾ぶんの皮を使います。

まず、くつの底になる部分を作ります。サケの皮を、背ビレが真下になるように置いて、その上に足を乗せます。そして、周りを折り曲げ、立ち上げてくつの形を作っていきます。

次に、足の甲にあたる部分として、別の皮を当てます。2枚の皮を、くつの形になるようにぬい合わせることでできあがりです。

魚の皮、ということで弱いような気もしますが、実際にはサケの皮はかなり厚く、雪の上ではく分には十分な強さがありました。

はく時には、まず、中にかわいた草（ポツケキナ＝スゲの仲間）をしきまします。そして、くつしたをはいて足を入れ、すきまに草をつめこみます。

こうしてはけば、雪の上を歩いても冷たなく、しかも軽いので歩きやすいということです。くつのウラ

の背ビレは、すべり止めになったともいいます。

かつて、このくつを使っていた人の話によると、油断すると、犬に食べられてしまうことがあり、それだけは困ったそうです。

地方によっては、サケの皮で服なども作られていました。ただ、今でも残っているサケ皮の服は北海道のものでなく、サハリン（樺太）のアイヌ民族などが作ったものです。



サケの皮で作られたくつ「チェブケリ」。(上士幌町・東泉園)

# 「道」としての川と「コタン (集落)」

環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今そして未来へ

用語

さくいん



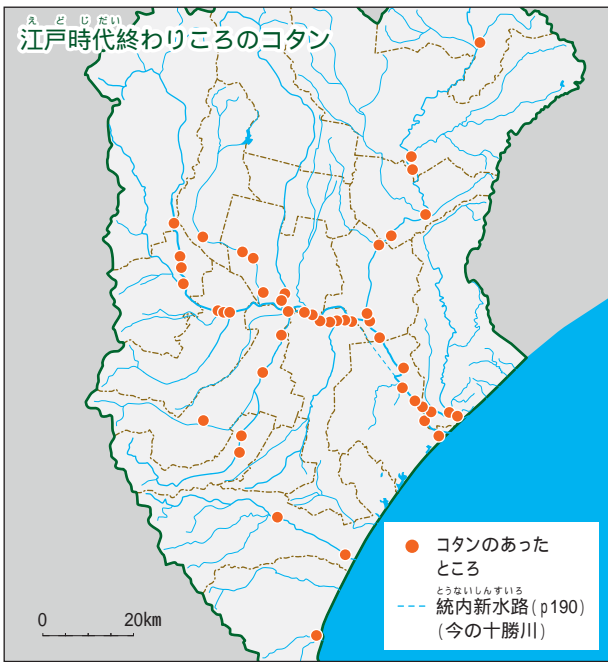
分かれ、つながりあう、明治29年(1896)ころの十勝川と支流。1858年の記録(1)を見ると、そのころの「十勝川」は南の流れ(赤矢印)だったらしい。(国土地理院所蔵の明治29年発行の1/5万地形図「止若」を使用。50%に縮小)

伝統的なアイヌ文化では、川(ペツ、ナイ)は大切な「道」でした。これは、ずっと昔から同じで、開拓が始まったあとでもしばらくは変わりません ( p175 )。

川は山から海までつながっています。川は何本もの細かい川(支流)が集まってできているため、川をたどれば、いろいろな場所とのつながりができます。

また、水が流れているので、草木があまりありません。通行のジャマになるものが少なく、見わたしもききます。川と関係なく陸を移動すると、丘の登り降りがありますが、中流～下流部の川(や川ぞい)にはなだらかな下り、またはなだらかな上りしかありません。

さらに、水には浮力(物を浮かべる力)があるので、舟を使うと、かつぐよりたくさんの荷物を運ぶことができます。川は交通路として、とてもすぐれているのです。



## 川とコタン (集落)

川は、食べ物をとる場所であり、道でもあります。そのため、内陸のコタン(集落)は川の近くにつくられました(海ぞいのコタンもあります)。大きな川から少し入った支流ぞいに、また、ちょっとした洪水でも水をかぶるところ(河原)ではなく、少し小高い場所につくられることが多かったようです。

1858年(江戸時代終わり近く)におこなわれた松浦武四郎( p142 )の調査によると、十勝には78のコタンに、284戸の家があり、1,336人(以上)の人々が暮らしていたといえます(一部1856年のデータ)(『十勝川の川舟文化史 湊標』より)。

(左)1858(1855)年、十勝にあったコタン(地点は推定・一部略)。(参考:『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌 下・下』、『帯広市社会教育叢書1 愛郷誌料』)

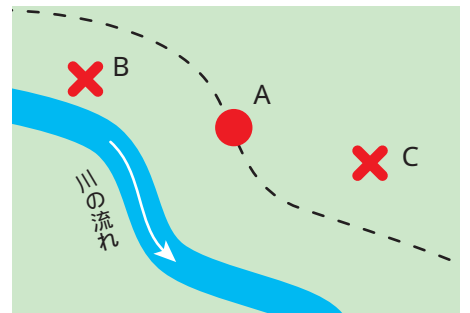
## 方向は川の流が基本

アイヌ文化では、川を基本として住むところを決め、移動する時にはおもに川や川ぞいを使います。位置関係についても、東西南北ではなく、川上と川下のたて方向、川側と山側の横方向によって表していました。

また、重要な場所にはそのようすを表した名前をつけ、これらを合わせて、広い範囲の地理をつかんでいました。ですからアイヌ語の地名や河川名には、地形や自然のようすが表されることがよくあります。

例えば美生川(芽室町)の「美生」は、もとは「ピパイロ」に当てた字で、「カワシンジユ貝(ピパ)が多い」という意味です。

さらに、川上はカムイ(神)のいる方向とされました( 家 p130 )



Aから見て、Bは「川上の川側」で、Cは「川下の山側」。

1 1858年の記録(きらく): 松浦武四郎( p142)『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』  
2 カワシンジユ貝(カワシンジユがい): カワシンジユ貝(ピパ)は穂(ほ)をつむ道具として使われ、その産地には「ピパ」が名づけられることが多い。十勝や全道の地名・

河川名で多く見られる。美馬牛(ピバウシ=ピバウシ)、美唄(ピバイ=ピバオイ)など。  
3 「ナイ」: 清水町のベケレベツ川支流には、その名も「ナイ川」(市街地から日勝峠に向かう)がある。

## 「内」や「別」は、「川」のこと ... アイヌ語による十勝の地名・川の名前

### 市町村名とアイヌ語

十勝の地名の多くは、アイヌ語の地名や川の名前からきています。「別」や「内」などの「べつ」「ない」は、ほとんどがアイヌ語の「ペツ」「ナイ」であって、どちらも「川」の意味です。

市町村名	名に関係する河川	アイヌ語の地名・河川名	意味
足寄	足寄川	エシヨロペツ	沿って下る川。
池田	—	(アイヌ語由来ではない)	明治29年(1896)にできた、池田農場から
浦幌	浦幌川	オラッオロ、ウラルポロほか	オラッオロ=ヤマシャクヤクのところ、ウラルポロ=霧が多い、ウライポロ=ウライ(魚をとるしかけ)が多い、など
音更	音更川	オトツケ	かみの毛のところ?
帯広	帯広川	オペレペレケ	河口がたくさん分かれている川
上士幌	士幌川(の上流)	シュホロペツ(スポロ)	シュホロペツ=ナベを水につけた川。スポロ=川水のうず巻いているところ
更別	サラベツ川	サルベツ	ヨシ原の川。「猿別」と同じ。サラベツ川は猿別川の支流
鹿追	クテクウシ川	クテクウシ	シカとり柵のあるところ。「鹿追」はこの意味から
士幌	士幌川	シュホロペツ(スポロ)	シュホロペツ=ナベを水につけた川。スポロ=川水のうず巻いているところ
清水	ペケレベツ川	(ペ)ペケルベツ	[ペ]ペケルベツ=[水が]きれいな川。「清水」はこの意味から
新得	パンケ新得川	シットク	ひじ(川が曲がったところ)や山が飛び出たところのこと
大樹	-	タイキウシ	ノミがいるところ
忠類(幕別町)	(今のセオトープイ川・朝日川か?)	チウルイトープイ	流れの激しいトープイ(当縁川)
豊頃	-	トッヨカオロ	意味不明
中札内	札内川(の中流)	サツナイ	かわく川
広尾	広尾川	ピロロ、ピオロ、ピルイペツほか	ピロロ=陰のところ、ピオロ=石のところ、ピルイペツ=「と石(5)」の川、ピラオロ=ガケのところ
本別	本別川	ボンペツ	小さい川
幕別	(幕別川)	マクンペツ	後ろにある川
芽室	芽室川	メモロペツ	わき水のあるところの川
陸別	陸別川	リクンペツ	高いところにある川

### いくつかの河川名とアイヌ語

今の河川名	アイヌ語河川名	意味
十勝川	トカッチまたはトゥカッチ	よくわかっていない。トカッチ=オッパイが焼ける、トゥカッチ=ゆうれい、などの説がある
利別川	トウシペツ	縄川。十勝アイヌと釧路アイヌの境目だから。縄はへびのことで、へびがいた川だから、へびのように曲がりくねった川だから、などの説がある
歴舟川	ペルプネイ	水が大きい者〔川〕。西南風がふくと増水するかららしい。はじめは、「歴舟」と書いて、ペルプネ、ペルフネと読んでいた。

4 ヨシ(葦、蘆):イネ科の草。水辺に多い。もとは「アシ」といういたが、「悪し(あし)」につながるという、ヨシ(「良し」につながる)と呼ばれるようになってきた。  
5 と石(磁石・といし):石材をみがいて美しくしたり、刃物をすって切れ味をよくし

たりするため(研ぐ〔とぐ〕ため)の石。  
6 幕別川(まくべつがわ):昭和21年(1946)発行の地形図では、今の猿別川(さるべつがわ)の最下流部(猿別市街から十勝川合流まで)が「幕別川」となっている。

# 「チブ」に乗って川を行く

環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん



幕別町蝦夷文化考古館(1: p150)に展示してある、実際に使われていたチブ(丸木舟)を補修したもの。1本の木からつくられる。

川で魚をとる時、また川を「道」として利用する時には、舟が使われました。

最も代表的な川舟は、「チブ(丸木舟)」です。

丸木舟というのは、太い木をけずり、くりぬくことで舟の形にしたものです。長さは6~7mくらいあります。

材料の木としては、オオバヤナギ(スス)、カツラ(ランコ)、ヤチダモ(ピンニ)、ハリギリ(アコシニ)、ミズナラ(ペロコムニ)、トドマツ(フツニ)、シナノキ(クペルケツニ)などが使われました。かなり太く、まっすぐな木でないと、チブづくりには使えません。

池などで実際に乗ってみると、意外なくらい安定しています。しばらく練習すれば、少しくらいなら、さおを使って動かすことができるかも知れません。(129ページ)



チブの先につけられた「イナウ(木をけずって作った祈りの道具)」。上士幌町・東泉園での「マレック漁の集い」。

## チブをつくる時の祈り

川や海は、おそろしい自然でもあります。今でも、船を水にうかべる前には、世界中でさまざまな儀式がおこなわれています。

アイヌ文化では、材料の木を切る時からカムイ(神)に祈ります。山に入る前には、カムイノミ(カムイへの祈り)をおこないます。いい木が見つかったら、シリコロカムイ(土地のカムイ)にカムイノミをしてから切りたおし、大まかに舟の形にします。そして、切り株に「イナウ(カムイに語るための祈りの道具)」をささげて舟の安全を祈ってからコタン(集落)に運び、完成させます。

初めて舟を使う時には、イナウを舟のカムイにささげ、「チブサンケ」という儀式を行います。傷んで使えなくなった時にも、舟のカムイをカムイの国へ送る「イワクテ」という儀礼がおこなわれます。

(カムイ p134)

## 樹皮の舟や板張りの舟も

そのほか、木の幹ではなく、キハダ(シケレペニ)やエゾマツ(スルク)といった木の「皮」を使った「ヤラチナ」もつくられました。強くはありませんが、早くつくることができます。

山野で狩りをしてたくさんえものがとれた時など、コタンまで運ぶために使われたようです。

また、海でメカジキ、マンボウなどの魚をとったり、オットセイ、イルカなどをとる時、また、交易品を運ぶ時などには、「イタオマチブ」が使われました。イタオマチブは、丸木舟の横に波よけの板をはりつけ、ブドウづるのロープやクジラのヒゲなどで、つづり合わせたものです。



海で使われたイタオマチブ(板張りの舟)の模型。

(帯広百年記念館: 2)

1 幕別町蝦夷文化考古館(まくべつちようえぞぶんかこうこかん): 幕別町字千住114-1 電話: 0155-56-4899 火曜日休館(p150)

2 帯広百年記念館(おびひろひゃくねんきねんかん): 帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155-24-5352 月曜日休館

## 「チブ」に乗ってみよう ... 上士幌町・東泉園での体験

上士幌町の東泉園には、上士幌ウタリ文化伝承保存会の人たちによってつくられた「チブ(丸木舟)」があります。丸太をくりぬくのは大変な作業で、数人が交代で作業にあたったそうです。

毎年秋に東泉園でおこなわれる「マレック(マレク)漁の集い(北海道ウタリ協会上士幌支部)」では、池にうかべたこのチブに乗ることができます( p120)。

チブは、さおや櫂によってあやつるのですが、櫂を使うのはかなり技術がいるため、ここではさおによって動かします。基本的には、舟の先に立ち、さおを池の底につき立てて、ぐっと力をこめることで進めます。

乗ってみると、かなり安定していますが、思いどおりに動かすことは簡単ではありません。

バランスをうまくとりながら、腕だけではなく足腰の力も使ってあやつらないと、変な方に進んでしまい、池に落ちそうになることもあります。



チブにチャレンジする中学生の子ども。(上士幌町・東泉園)



東泉園の位置。上士幌町字上音更。



なかなか思いどおりに進まない。(上士幌町・東泉園)

### とても長い歴史をもつ丸木舟 ... 和人をも運んだ「チブ」

アイヌの人に伝わる、舟についての伝説を紹介します(話:吉田常吉氏〔音更〕『杖のみたま(吉田巖)』より)

「ある時シャマイクル(人のすがたをしたカムイ・伝説の英雄)が、土で舟をつくって海に乗り出して、その舟をくつがえしたり、あるいはこわしたり、おぼれるまねをして苦しそうに泳いでいた。これはアイヌに航海の苦しみを知らせ、舟が大事なものであることを示したのだ。アイヌはこれを見習って、丸木舟をつくった。(一部略、やさしいことばに直してあります)」

アイヌの人々はこうした物語を通して、舟の大切さや舟をあやつる時の心がまえを子どもに伝えたのでしょ

石狩市の遺跡「石狩紅葉山49号遺跡」では、およそ4千年前の縄文時代の丸木舟(一部)が見つかっています( p93・p87)。

丸木舟はアイヌ文化の時代だけではなく、もっと前の時代から何千年間も(おそらく1万年以上)使われてきてきました。

江戸時代に入り、和人たちがやって来るようになると、川をわたるための渡し舟として、アイヌの人のチブが利用されました。

あるいは、江戸時代末期に北海道内陸を探検した松浦武四郎たちは、川を下るためにアイヌの人のチブに乗せてもらっています。

さらに、明治時代になって開拓者たちがやって来るようになると、人やもの、農産物などを運びます。十勝川では河口部の大津(豊頃町)から内陸までの間を上り下りし、開拓の始まりを支えました。( p143・p159)

また、アイヌの人による渡し舟は、かなりあとまで川をわたる時の大切な足となっていました。



アイヌの人があやつるチブに乗って、川をのぼる開拓者。(上徳善七が描かせたもの)

(上徳善司氏蔵)

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

# チセ（家）の建て方と川

環境

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

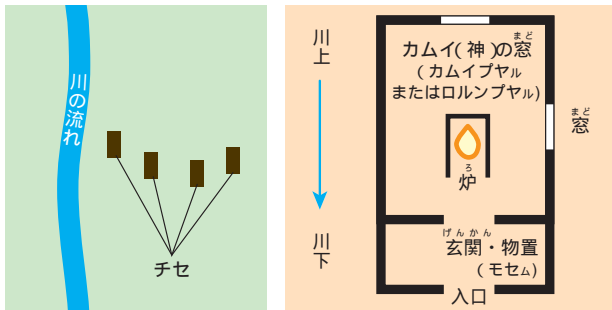
第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん



かみしほろちやう とうせんえん ふくげん  
上土幌町・東泉園に復元されたアイヌ民族の家(チセ)。右手おくに見えるのは、イオマンテ(3)のための子グマのおり。上土幌ウタリ文化伝承保存会。



川の流れと、チセ(家)の向き。チセ内部を上から見たイメージ。

家のことをアイヌ語で「チセ」といいます。

チセは、上から見ると、だいたい長方形の形に建てられます。カシワ(アイヌ語でコムニ)やハシドイ(ブンカウ)などの丸太を柱にして、骨組みにはヤチダモ(ピンニ)などを使い、壁や屋根にはヨシ(別名アシ:アイヌ語でサルキ)やススキなどの草の茎を厚く張ります。

復元されたチセで夜を過ごした人の話によると、夏はずすしく過ごしやすく、冬は、炉でおき火を絶やさないようにしておけば、暖かく休めたということです。

これは、厚い草の壁が、今でいう「断熱材」になっていたためです。

## チセの向き

チセは、コタン(集落)の近くにある川の流れと平行に建てられました。

川上の窓(ロルンパル[上座の窓])は、カムイ(神)が入り出る「カムイパル[神の窓]」として、大切にされました。人が外からのぞいてはいけません。

人の出入り口は、川下側にありました。ここに玄関と物置を合わせた「モセム」という、張り出しが作られることもありました。(カムイ p134)

## チセの中

チセのだいたい中央には「炉」が作られ、ここで火をたいて、煮炊きをしたり、部屋を暖めたりします。炉の上には「炉だな」が作られ、そこから「炉カギ」が下がっています。

炉だなやその上には肉や魚を下げ、けむりでいぶして「くんせい」を作り、保存食にします。

炉カギには鉄なべなどをかけて、料理をします。

また、火はとても暮らしに大切なので、身近な「カムイ(アペフチカムイ)」とされ、炉の左おくに「イナウ」が立てられています。(カムイ p134)

床は土間ですが、そこにかわかしたヨシやススキなどの草をしきつめます。その上に、同じくヨシやススキなどで作ったすだれをしき、さらにその上に、ガマ(水草の一種:シキナ)などで織ったゴザ(キナ)をしきました。

季節によって下草の厚さを変えることで、過ごしやすくしました。



かみしほろちやう とうせんえん ふくげん  
上土幌町・東泉園に復元されたチセの内部。左おくの窓が、「カムイパル(神の窓)」または「ロルンパル(上座の窓)」。

外からのぞいてはいけない。復元:川上英幸氏、上土幌ウタリ文化伝承保存会。(なお、東泉園のチセの床は土間ではなく、高床につくってある)

1 おき火(おきび・燻火):まきが燃えたあと、炎(ほのお)がおさまり赤くなったもの。赤く熱した炭火。おこし火。おき。炉(ろ)で炎が立つほど燃やすと、空気の対流のため風が起き、外気をすいこむのでかえって寒くなるという。

2 断熱材(だんねつざい):熱を伝わりにくくするための材料。家の場合、外の暑さ・寒さを伝えず、部屋の中の温度を保つはたらきをする。グラスウールなど。



かみしほろちようとうせんえん かわかみ けっしょう  
**上士幌町、東泉園のチセ ... 川上さんと仲間の苦勞の結晶**

上士幌町に住む川上英幸さんは、十勝のアイヌ文化を伝えていこうと、人に聞き、資料を調べ、北海道各地をまわり、上士幌ウタリ文化伝承保存会の仲間たち(アイヌも和人も)といっしょにチセをつくり上げました。

チセのまわりには、カムイ(神)をまつる祭だん(ヌサ)クマの霊送り(イオマンテ)のための子グマのおり、高床式の食料庫なども作られていて、アイヌ民族の伝統的な生活を感じることができます。また、さまざまな生活用具なども作られています。

チセをつくる時は、まず屋根の骨組みをつくります。次に地面に柱を立て、その上に屋根を乗せます。壁や屋根にかわいた草を厚くふいて、できあがりです。

屋根の骨組みでは、三本の丸太を「三脚」のように組み合わせたものを、両はしに取り入れています。三角形は、「トラス構造」といって、形をこわれにくくするための基本形です。



東泉園の位置。上士幌町字上音更。

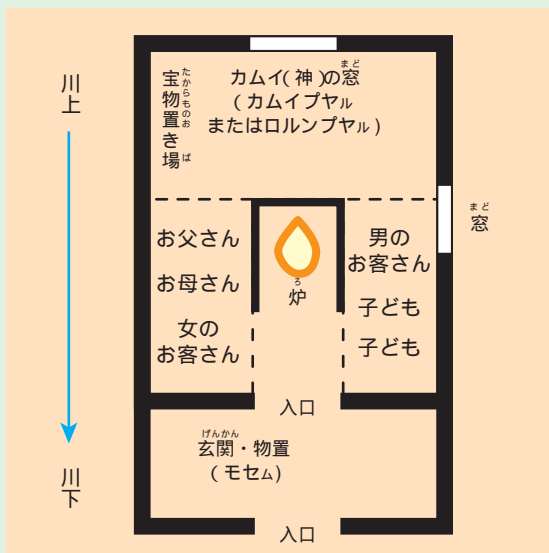


高床式の食料庫につけられている「ネズミ返し(ネズミを防ぐしかけ)」の説明をする川上英幸さん。上士幌町・東泉園。



東泉園につくられたチセの、屋根の骨組み。手前とおく、それぞれに三脚のような丸太組みがある。(黄色の矢印)

**川の流れと神様の方向を考えて ... 体験・観察のポイント**



チセの中では、居場所がきちんと決められていた(上から見たところ)。

**まずお話を聞く**

どんな物よりも、どんな資料よりも、実際に経験している人の話は貴重です。

**川の流れる方向をつかむ**

東泉園のチセは、川の方向に合わせてつくられています。近くの小川や音更川が、どちらに向かって流れているかを確かめましょう。

**チセの中で家族になってみる**

チセの中に入れたら、お父さん、お母さん、子どもの役を決めましょう。かつては左の図のように、すわる場所がきちんと決まっていた。

また、男のお客さんは、入口に立ってせきばらいをすると、家の女の人が出むかえます。また、女のお客さんは、入口にしゃがんでせきばらいをします。入口のすだれは、右側を左手でかき上げるのがマナーでした。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

3 イオマンテ：子グマをコタン(集落)で1年ほど育て、その霊(れい)・カムイ)に多くのおみやげを持たせ、親のいるカムイの国(カムイモシリ)に返して(帰して)あげる(送る)、という儀式(ぎしき)。クマのほか、シマフクロウなどでもおこなわれる。

4 イナウ：折り(いのり)のこたばをカムイ(神)へ伝えてくれるもの(祭祀具：さいしぐ)。カムイへの「おくりもの」でもある。木をけずってつくる。

# 語って伝える・歌やおどりで伝える



「イオル体験ツアー」の参加者に向かって語る川上英幸さん。体験談を、文字では伝わらない独特の語り口で語ってくれた。(上士幌町・東泉園：2)

伝統的なアイヌ文化では、物語などは、すべて口伝（口承）で伝えられました。

とくに、「サコロペ（英雄叙事詩）」や「オйна（神々の物語）」、「トウイタク（昔話）」と呼ばれる物語は、アイヌ民族の口伝による文化（口承文化）を代表するものです。何百年間も、家族の間で、あるいはコタン（集落）の中で、代々伝えられてきたのです。

内容はさまざまで、いろいろなカムイについての物語、英雄や戦いの伝説のほか、人間が生きていく上で大切な教訓や道徳を物語としたものなどがありました。

文字で伝えられることもたくさんありますが、語りじやなければ伝えられないこともたくさんあるのです。



ユクエピラチャシ跡（陸別町）（p117）。カネラン率いる十勝アイヌ軍と厚岸アイヌ軍が戦った時、厚岸軍がここに砦を築いたという伝説がある。（『改訂増補 アイヌ伝承と砦』より）

## 話し合いによる「戦い」

アイヌ民族にも武力による戦いがありましたが、一方で、話し合いによる「争い」も重要だったようです。チャシによっては、そこで「チャランケ（談判）」をしたという言い伝えもあります（チャシ p116）。

また、陸別のユクエピラチャシ（p117）には、「カネランは勇将で、気も強く、『弁舌も達者』であった。彼は『雄弁を悪用し』、他の人に無理難題をふっかけ、十勝や釧路のアイヌの人の宝物を取り上げていた。しかし、厚岸の100歳をこえた老女に『論破』された」という伝説があります。（『改訂増補 アイヌ伝承と砦』より、改変）

あまりいい例ではありませんが、アイヌ文化では「話す能力」が、とても大きな力を持っていたことがわかります。

## ことば遊びに歌やおどり

伝統的なアイヌ文化には、早口ことばや鳥の鳴き声にことばを当てる「聞きなし」などのことば遊び、日常や祈りの時などに使われる唱えごとなどがあります。

また、リムセ（おどり）やウポポ（歌）も数多くあります。毎日の生活の中で、あるいは儀式をおこなう時に、歌やおどりが演じられ、伝えられてきました。

また、物語であるサコロペやオйнаも、歌のように節をつけて歌われました。

そのほか、口を使って音色や音の高さを変える楽器（口琴）である「ムックル」などの演奏が伝えられています。

こうした口伝による文化は、地域ごとに独特な種類のもものが誕生し、発展してきました。



帯広カムイウポポ保存会の人たちなどによる「バツタキウポポ（バツタのおどり）」。（上士幌町・東泉園での『オッパイ山大祭』：3）

1 サコロペ、オйна：ほかの地方では、サコロペは「ユカラ」、オйнаは「カムイユカラ」と呼ばれる。

2 東泉園（とうせんえん）：上士幌町字上音更（p120・p129・p131）

3 オッパイ山（オッパイやま）：上士幌町と足寄町の境にある、ピリベツ岳と西クマネシリ岳の二つの山。三股（上士幌町）から2つのオッパイに見えることからこう呼ばれる。アイヌ民族の聖地とされ、祭りがおこなわれる。（p134）

## ムックル<sup>4</sup>をやってみよう... 独特のひびきに心をゆだねる<sup>どくとく</sup>

ムックル<sup>4</sup>は、アイヌ民族<sup>でんとうてき</sup>の伝統的な楽器の一つです。世界各地にある「口琴<sup>こうきん</sup>」の一つで、口もとで音を鳴らして口の中でひびきを大きくし<sup>きょうめい</sup>（共鳴させ）、口の形や息などによって曲をかなでるものです。

今よく目にするものは竹でできていますが、チシマザサやノリウツギ（アイヌ語でラスパニ）などで作られることもあったようです。

ムックルを手にしたら、まずは口に当てないで、音を出せるようになりましょう。コツは、少しななめ向こうに糸を引くことと、引っぱったらすぐ糸をゆるめることです。なれないうちは、けっこう力がいらいます。

「ビョーン・ビョーン・ビョーン…」と小さいながらも、音がひびくようになったら、動かさない方の手をほおに固定して、口を半開きにします。さっきつかんだコツのとおり糸を引くと、ひびきが大きくなるのがわかります。

あとは、口を大きくしたり小さくしたり、あるいは息をふきかけることで、音程や音色を変えることができます。あまりうまくできなくても、自分で鳴らすムックルの音色は体と心の中にひびきます。



ムックルの演奏をする東泉園(上土幌町)の川上けさ子さん。右後ろは帯広百年記念館(5)の内田学芸員。(『イオル体験ツアー』より)



(左)「イオル体験ツアー」で川上さんの指導を受け、ムックルを練習する(上土幌町・東泉園)。(右)ムックル(幕別町蝦夷文化考古館 p150)。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

## アイヌ文化の手工芸<sup>しゅこうげい</sup>... 自然と交易から産み出される服や道具<sup>こうえき</sup>

服や道具をつくる手工芸<sup>しゅこうげい</sup>の技術も、親から子へと伝えられながら、地域ごとに特ちょうある文化を発展させました。材料には、草や木など身近な自然のものと、交易<sup>こうえき</sup>で手に入る、本州や大陸のものがありました。

布<sup>ぬの</sup>は、本州からきた木綿の布を使うほかに、木の皮のせんいやイラクサなどの草のせんいから織られました。

オヒョウ(アソビウ)という木の内皮からとったせんいで作った服は「アットウシ」といいます( p141)。木の皮をむき、内側のやわらかい皮を水や温泉につけてふやかし、大変な手間をかけてせんいを取り出しました。

衣服には、ししゅうでもよう(文様)が入られ、アイヌ文化のシンボリックな存在となっています。

布やししゅうをぬうための針は、交易によって手に入るもので、大変貴重でした。女性は細工した「針入れ」に入れ、大切に身につけたといいます。幕末の探検家、松浦武二郎( p142)は、世話になるアイヌの人たちへのみやげとして針をわたして、大変喜ばれました。

また、「チタルベ」といわれる文様入りのゴザは、家の壁や祭だん(ヌサ: p134)をかざりました。チタルベは、沼などの水辺に生えるガマ(シキナ)という草に、オヒョウやシナノキ(クペルケツニ)といった木の内皮を染色したテープ状のものを織りこんで作られました。

こうした、ぬう・編む・織るといったことは、女性の仕事でした。

男性の手工芸は、彫刻や木工です。狩りのための道具や小刀、タバコ入れなどが、さまざまなデザインで作られ出されました。



服に入れられたししゅう(釧路地方)。(『山本多助エカシ展』より)



細工された小さな刀(マキリ)。(上土幌町・東泉園)

4 ムックル: 本格的な演奏は、帯広カムイトウボボ保存会など、各地で伝承活動をおこなっている人たちの演奏や、安東ウメ子さんのCD(幕別町教育委員会)などで聴くことができる。

5 帯広百年記念館(おびひろひやくねんきねんかん): 帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155-24-5352 月曜日休館

6 幕末(ばくまつ): 江戸幕府(えとばくふ)末期の略で、江戸時代終わりのこと。

# 3.カムイとともに

環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん

## 「カムイ」って何だろう？



(上)「オッパイ山大祭」でのカムイ(神)への儀式「カムイノミ」。上士幌ウタリ文化伝承保存会。(上士幌町・東泉園: 2)



(右)オッパイ山(3)はアイヌ民族の聖地とされる。(上士幌町十勝三股から)

「カムイ」はよく、アイヌ語で「神」のことだといわれます。まちがいではないのですが、人間よりもはるかにえらい「神様」とは、少しちがいます。

私たちにとって、人間以外の生き物や自然(現象)は、命のもとであり、人の役に立つものであり、一方で、かなわないほどの大きな力を持ったものです。

すごく身近なだけけれど、人間の力がおよばないところを持った存在、尊敬して、感謝しながら利用もする相手、中には悪さをするヤツもいる、そんな「自然」が「カムイ」なのです。

この世はカムイ(自然)とアイヌ(人間)で成り立っているのです。



ヒグマ。山の神(キムンカムイ)は、家の壁にかけてある毛皮とツメをつけ、クマのすがたになり、その毛皮と肉をおみやげとしてアイヌモシリにやって来てくれる。(写真:辻博希氏)

### 「目的」を持っている自然の生き物

伝統的なアイヌ文化では、アイヌ(=人)の世界である「アイヌモシリ」とカムイの世界である「カムイモシリ」があります。

自然界にあるものは、動物や植物でも、カムイモシリから「何かの目的を持って」アイヌモシリへ来た存在なのです。

例えば、木をただ切りたおしてしまうということは、仕事をするために外国から来た人を、何もいわず、何もさせずに送りかえしてしまうのと同じことです。あるいは、説明もせずイヤな仕事をさせることです。そんな失礼なことができるでしょうか。

舟などの材料にするというような理由がある時に、ちゃんと説明して、「私の役に立ってください」とお願いするべきでしょう。

### カムイに語りかける

これらカムイに対して語りかける時は、直接ではなく、木をていねいにけずって作られた祭祀具である「イナウ」や、うすくヘラのようにした「イクパスイ」を使います。それらを通すことによって、言葉がカムイに正しく届くのです。

家(チセ)の外の川上側にはヌサ(祭だん)がおかれ、イナウが立ちならんでいます。

火のカムイ(アペフチカムイ)は、人間の身近にあり、ほかのカムイとの仲立ちもしてくれるので、日々の生活の中でも儀式の時でも、必ず祈りをささげます。



(上)たくさんの「イナウ」が立てられた「ヌサ」。  
(左)「イナウ」をささげ、「イクパスイ」を使っているところ。  
(『オッパイ山大祭』上士幌町・東泉園)

1 アイヌ: アイヌということばには、(神や動物に対しての)人間、(メノコ[女性]に対しての)男性、(民族名としての)アイヌ、などの意味がある。(参考:『アイヌ語沙流方言辞典』より)

2 東泉園(とうせんえん): 上士幌町字上音更(p120・p129・p131)

3 オッパイ山(オッパイやま): 上士幌町と足寄町の境にある、ピリベツ岳と西クマネシリ岳の二つの山。三股(上士幌町)から2つのオッパイに見えるのでこう呼ばれる。

# 「カムイ」としての川

環  
境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展  
そして未来へ

用  
語

さ  
く  
い  
ん



(上) 歴舟川 (ベルブネイ・大樹町)。



(右) 歴舟川の支流である歴舟中の川(ルウドルオマ)上流には、その名も「神威岳(カムイヌプリ)」がある。

川(ペッ、ナイ)はアイヌ民族にとって、水や食べ物  
をあたえてくれるところであり、道でもありました。今  
でも、水道水の多くが川から取られています。

つまり、川は暮らしを支えてくれる存在であり、生き  
ていくためになくてはならないものです。

また、季節や天気、場所でそのようすを大きく変え、  
思い通りにならないことがよくあります。性格を持ち、  
気分が変わる人間のようでもあります。

つまり、川は「カムイ」なのです。そして川にはワケ  
カウシカムイ(水のカムイ)やミントチカムイ(精霊の  
ようなもの)などが暮らしているのです。

さらに、上流には高い山があり、そこには  
山の神(キムンカムイ)がいました。

現代になり、川とのつきあい方も川のすが  
たも変わりました。今の川に、カムイたちを  
見つけられるでしょうか？



「マレク(マレク)漁の集い」で漁の前におこなわれるカムイノミ。北海道ウタ  
リ協会上土幌支部。(上土幌町・東泉園)

## サケをとる前の儀式

アイヌ文化では、サケ(カムイチェブ:カムイの  
魚)が川をのぼり始め、漁を始める時、「アシリ・  
チェブ・ノミ(新しいサケをむかえる時のカムイへ  
の祈り)」をおこないます。

こうしたカムイへの祈り(カムイノミ)の時には、  
それぞれのカムイに、木をけずって作った「イナウ  
(カムイに言葉をきちんと伝えるための祭祀具)<sup>5</sup>」を  
ささげます。

## サケをとる時の「礼儀」

サケを網やマレクでつかまえ、舟や陸にあげると、太さ  
2~3cm、長さ30~40cmくらいの「イパクニ」と名づけ  
られた木の棒で、頭をたたいて殺します。

ただ、このイパクニはただの棒ではなく、「イナウ」で  
もありません。サケに、感謝の気持ちを伝えるものなのです。

また、サケをとるときにはとりつくさないで、川の上流  
に住む人たちの分や、サケを食べる動物の分も残されてい  
たといいます。

そうすることで、川や自然のめぐみ(サケや動物)をと  
る暮らしを、みんなですずと続けていくことができるよう  
になっていました。



今でもサケを殺すのに、木の棒<sup>ぼう</sup>を利用する。固さや重さなどからしても、  
木の棒<sup>ぼう</sup>がちょうどいいという。(サケをふ化して増やすための捕獲場)

4 何かの目的(なにかのもくてき): 人にとってありがたい目的ばかりではなく、例えば  
パートゥムカムイは病気(とくに伝染病)をまくという目的を持っている。

5 祭祀具(さいしぐ): 神々などをまつための道具。

わ じん

# 4. 和人とのかわり

こう えき

## 交易とアイヌ文化

地域産業  
国際理解  
環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



(上)シントコ。



タマサイを首にかけて正装してムツクルを演奏する川上げざ子さん。(上土幌町・東泉園)

トウキ。上にイクバ イタンキ。ふだん使ったおわん。(器は帯広百年記念館：1)

擦文文化からアイヌ文化に移っていくと、刃物や矢の先につけるヤジリ、また、煮炊きするためのなべなどが、石器や土器ではなく鉄製となりました。

鉄製品は、本州（や北海道南部）にすむ「和人」から手に入れました。それらをそのまま使ったり、別のものに作り直したりしていたのです。

カムイノミ（神への祈り）などの儀式やふだんの暮らしで使われる、「シントコ」「トウキ」「イタンキ」といったうるしぬりの器も本州から手に入れました。

また、儀式の時に男性が着る「陣羽織」、女性が身につける「タマサイ（首かざり）」のガラス玉や鏡などは、大陸や本州から手に入れていました。（ p112）

そのほか、和人から手に入れたものには、木綿の布、米、酒、タバコ、針などがあります。

### 北海道からの「輸出品」

アイヌの人々は、本州や大陸のものを手に入れる時、交かん<sup>ほんしゅう</sup>に北海道の産物をわたしました。

ワシ・タカの羽やアザラシの毛皮は、古くから、本州で高級品として喜ばれています。そのほか、クマやシカなど動物の毛皮、干したサケ、コンブ、あるいはアットウシ（木のせんいで織られた布・服）などが和人にわたされました。

また、サハリンを通して手に入る大陸の絹織物（蝦夷錦）などが、アイヌ民族の手をへて和人の手に、反対に和人からアイヌ民族の手に入ったものが、サハリンを通じて大陸にまでわたりもしました。



(上)オオタカ。羽は矢羽として、またオオタカ自体が鷹狩りのために求められた。



タカ(オオタカかハイタカ)の羽。

### 大切な交易が...

儀式から暮らしまで、アイヌ文化の成り立ちにとって、交易はとても大きな意味がありました。

一方、和人にとって、アイヌ民族から手に入るものは、めずらしく貴重なもので、豊かな人々にとって人気の的であり、商売すればもうかるものでした。

これを商売にした和人は、もうかってもうまくいなくても、もっともうけたくになります。そのためには、何をしてもいいと考える人が出てきます。

大切な交易は、やがて、アイヌ民族を大きく苦しめることにもつながっていきました。



浦幌町、昆布刈石の海岸。アイヌ語で「コンブ・カルウシ=コンブをいつもとるところ」。

1 帯広百年記念館(おひひろひゃくねんきねんかん): 帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155-24-5352 月曜日休館  
2 北海道からの輸出品(ほっかいどうからのゆしゅつひん): 18世紀にはいと、瀬戸内

海産の塩がたくさん北海道にやって来ることによって、サケの塩引きの「輸出」が多くなる。これは、江戸など東日本の食生活に変化を与えた。また、コンブなどの「輸出」も増え、これは長崎を通じて日本国外へも再輸出された。



# シャクシャインの戦い

地域産業  
環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展と今、そして未来へ

用語

さくいん



17世紀前半ころまでに、金がとられるようになったところ(●)。  
(参考:『アイヌの歴史と文化』より、改変)

松前藩の交易支配が始まり、「場所」(p137)が決まれば、アイヌ民族は自由な交易ができなくなっていきます。

「場所」によっては、アイヌの産物が松前藩によって安く買いたたかれます。例えば、それまで干しザケ100本に対して、米を2斗受け取っていたものが、0.7~0.8斗と三分の一近くにまで安くされることもありました。

また、強制的に大量の産物を約束させられ、出せなければ子どもを人質に取られる、といったことまで、おこなわれたようです。

さらに、松前藩にとって大きな収入源であった、タカと砂金をとりに、和人たちがアイヌ民族が生活しているところに入りこみはじめます。十勝でも1635年には、歴舟川下流周辺(大樹町)などで砂金とりがおこなわれています。

こうした、和人のひどいやり方や、生活地域への侵入が、各地でアイヌ民族を苦しめていきました。

## 始まりはアイヌ民族同士の争い

1648年のころから、シベチャリ(新ひだか町静内)地方の人たちとハエ(日高町門別)地方の人たちが、アイヌ民族同士で争いを続けていました。狩りや漁をする範囲(イオル)の争いでした。

1653年には、シベチャリのリーダーであるカモクタインが殺され、1668年には、ハエのリーダーであるオニビシが、シベチャリの新リーダーとなったシャクシャインたちによって殺されます。

そんな中、1669年、オニビシの親せきであるウタフが、松前藩に武器などの援助をたのみに行きますが、断られます。その帰り、ウタフは死んでしまいます。病死だったようですが、アイヌの人々には、松前藩による「毒殺」だと伝わりました。



シャクシャインとオニビシの力の広がり。  
(参考:『アイヌの歴史と文化』『十勝二万年史』より、改変)

## シャクシャインの呼びかけから

ウタフ「毒殺」を聞いたアイヌ民族には、和人に対する不安が広がります。もともと、和人のやり方への不満やいかりもありました。そこへ、シャクシャインが、

「アイヌ同士の争いはやめ、ひどいことをし続ける和人に対して戦おう」と広く呼びかけました。

1669年6月から7月にかけて、東は白糠周辺、北は増毛周辺に至るまで、アイヌ民族が和人に対して戦いを始めました。十勝でも戦いが起き、和人ら20人が殺されました。

これに対して江戸幕府は、松前藩だけでなく、弘前藩など東北地方の藩に対しても出兵を、またはその準備をするよう、命令を出しました。



●: 和人がおそわれたところ。地名は地方や「場所」の拠点名。  
(参考:『アイヌの歴史と文化』『十勝二万年史』より、改変)

1 2斗(2と): 今、1斗=約18リットルなので、2斗は約36リットル。時代や地方によって少しずつ変化する。ちなみに1斗=10升(しょう)、1升=10合(ごう)、米10kgが約6.6升なので、2斗は10kg入りの米袋、約3袋分。



まつまえはん はんげき  
松前藩の反撃

7月末、松前藩は鉄砲をそろえ、オシャマンベ（長万部）までせめこみますが、アイヌ軍は山中にかくれて毒矢を放ちます。

せめあぐねた松前藩軍は、クヌイ（国縫・長万部町）までしりぞきました。

9月、松前藩は軍を増強し、海をわたるなどして総攻撃を始めます。それと同時に、松前藩とかかわりの深いアイヌ民族に対して、個別におどしをかけ、切りはなしては降伏させていきます。

アイヌ軍は分断され、シャクシャイン勢は追いつめられていきました。



オシャマンベ(長万部)、クヌイ(長万部町国縫)、シベチャリ(新ひだか町静内)と、シャクシャインが殺されたピボク(新冠町字高江)。(参考:『アイヌの歴史と文化』より、改変)

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

だまし討ちで殺されたシャクシャイン

10月、松前藩軍は、シベチャリ（新ひだか町静内）のシャクシャインに対し、静内川・新冠川をはさんだピボク（新冠町）に陣地を張ります。現地指揮官である佐藤権左衛門はシャクシャインに対し、戦いをやめることを提案します。シャクシャインは迷いますが、受け入れることにしました。

その夜、シャクシャインらは「仲直り」の宴会に招かれます。シャクシャインとその供たちが酒に酔ったところを、突然、松前藩兵が取り囲んで殺しました。だまし討ちだったのです。

そして権左衛門らは、次の日、シャクシャインのチャシ（砦）： p116)を一気にせめ、焼きはらいました。

その後、アイヌ側の勢いは弱まっていきます。翌々年の1671年春、ついにシャクシャインの戦いは終わりました。



もう少し細かいこと

寒かったところで、噴火もあった

16～17世紀ころは、その前後に比べて寒い時期でした。この時期は「小氷期」と呼ばれています。( p103)

また、1640年には駒ヶ岳（鹿部町・森町）が、1663年には有珠山（壮瞥町・洞爺湖町・伊達市）が、1667年には樽前山（千歳市・苫小牧市）が噴火をし、多くの死者が出ています。とくに樽前山の噴火は、その火山灰が十勝まで飛んできているほどの大きな噴火でした ( p61)。

これらのことは、北海道の自然に対しても影響があったでしょう。自然とともに生きるアイヌ民族にとって、物質的にも精神的にもダメージがあったのではないのでしょうか。

あくまで想像ですが、松前藩による交易独占などの政策のほか、こうした自然現象も、シャクシャインの戦いが起きる背景となっていたのかも知れません。

新ひだか町の「シャクシャイン記念館」

シャクシャインの本拠地であったシベチャリ（静内）は、今の新ひだか町にあります。

この新ひだか町静内真歌の真歌公園には「シャクシャイン記念館」や「アイヌ民俗資料館」もあり、静内を中心としたアイヌ文化について知ることができます。

また毎年、「シャクシャイン法要祭」がおこなわれています。



シャクシャイン記念館。



アイヌ民俗資料館。

2 だまし討ち(だましうち): だまし討ちは、アイヌ民族との戦いで、和人が何度もおこなっている。松前氏となる前の蠣崎 かきざき 氏は、1515年のショヤコウジ兄弟との戦いの時に、また、1536年のタリコナとの戦いの時に、いずれも仲直りを呼びかけ、その祝い

の場でごちそうや酒をふるまい、よったところでせめこみ殺している。同じようなことは、四国の土佐藩(高知県)でも起きていて、よその土地から来て支配者となった山内氏が、地元の有能な武士を相撲大会に呼びだし、そこでみな殺しにしている。

# 「場所」での支配の「民営化」

地域産業  
環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



「オムシャ」。オムシャはもともとは、和人がアイヌ地(蝦夷地)に来て交易する時の儀式だった。シャクシャインの戦い後、松前藩がアイヌ民族を支配するための行事となった。(『日高アイヌ・オムシャの図』 函館市中央図書館蔵)

シャクシャインの戦いののち、松前藩によるアイヌ民族支配はきびしくなりました。

これまで、アイヌ民族は松前藩から独立した身分だったのですが、松前藩主に従うことを誓わされました。

北海道各地の交易地であった「場所」についても、変化がありました。

松前藩の上級家臣が直接支配するのではなく、商人に「場所」をまかせて、かわりに毎年一定のお金を受け取るやり方(場所請負制度)に変わっていったのです。

十勝にあった「トカチ場所」でも、18世紀前半ころに、商人による支配が始まりました。

トカチ場所の拠点は、はじめトカチ(十勝太:浦幌町)にありましたが、その後ピロウ(広尾)に移ります。

年	支配商人(場所請負人)
18世紀末	濱屋久七
"	栖原角兵衛
1799~1811	(幕府の直接支配)
1812	近江屋上田三郎次
1819	大阪屋卯助
1825	福嶋屋嘉七
1841	福嶋屋清兵衛
1854 (~1869 = 明治2年)	福嶋屋杉浦嘉七

18世紀末より、トカチ場所を支配した商人(場所請負人)。  
(『蝦夷草紙別録』、『栖原角兵衛履歴』、『場所請負人及運上金(河野常吉)』、『十勝川の川舟文化史 濤標』、『新北海道史年表』より)

## 商人による「場所」の支配

商人にとっては、もうけることが一番大切なことです。ものを交かんする交易よりも人をやとって働かせた方が、ほしいものをたくさん手に入れやすく、命令しやすくなり、もうけやすくなります(失敗すると損も大きくなりますが)。

アイヌの人々は、自分たちの意志で狩りや漁をしていた状態から、商人にやとわれるようになりました。商人の命令で、漁をさせられ、産物加工をさせられるようになっていったのです。

一方で、商人には、アイヌの人が苦しんだり困ったりしないように、との指示も出されていました。1789年には十勝川が凶漁で、飢え死にする人が出たため、当時の支配商人・栖原角兵衛は救助米を出して、アイヌの人100人を助けたといわれています。

## 「場所」で行われたひどい支配

すべてのアイヌの人たちが、商人に使われてばかりいたわけではなく、自分で漁をした魚を商人に売る人もいたようです。

しかし、多くの「場所」では、自分でとった魚のうち2割を商人に納める「二八取」をさせられたり、商人の漁場にやとわれた人が一年中働かされ、家族の待つコタン(集落)へ帰れなかったりするなど、ひどい支配がおこなわれました。

中でも、クナシリ(国後島)とメナシ(東部・知床や根室など)では、支配商人の飛騨屋らが、アイヌの人を安い労賃で冬のたくわえもできないほど働かせ(飢え死にする人も)働きが悪いといってマキでたたき殺したり、アイヌ女性に乱暴するなど、めちゃくちゃなことがまかり通っていました。



アイヌ文化期の北海道の東部(メナシ)と国後島(クナシリ)。

## クナシリ・メナシアイヌの戦い

1789年、こうしたひどい状態であったクナシリで、マメキリの妻とサンキチというアイヌの2人が、和人からもらったものを口にしたあと、相次いで死にました。

これをきっかけに、クナシリの若手アイヌら130名が立ち上がり、飛騨屋支配人らをおそいます。襲撃は対岸のメナシ地方にも広がり、71人の和人が殺されました。

松前藩は260人の兵をこの地に送り、協力的なアイヌの長らを通じて彼らをなだめ、ノッカマップ（根室市）に集めます。

しかし、松前藩兵は集まった人たちをとらえると、「飛騨屋もひどいことをしていたが、うったえもせず多くの人を殺したことは許せない」として、殺害をおこなった37人に対して死罪をいいたしました。

数人の首が斬られたあと、さわいだ牢の中の人たちは鉄砲で撃たれ、逃げようとした人はやりでつかれ、37人全員が殺されました。



1789年、クナシリ・メナシアイヌの戦いが起きた北海道東部。  
●：和人をおそったところ。死刑はノッカマップ（根室市）でおこなわれた。  
（『アイヌの歴史と文化』より、改変）

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん



(上)北海道のツル、タンチョウ（サロルンカムイ）。塩づけにされ交易品とされた。



(上)北海道のシカ、エゾシカ(ユク)。



(右)「アットウシ」。オヒョウ（アソビウ）という木の肉皮のせんで作られる服。

(上土幌ウタリ文化伝承保存会 上土幌町・東泉園)

## 「トカチ場所」での産物

1739年ころ、トカチ場所では、干したサケ、ワシ・タカの羽、塩づけのツル、シカの皮、クマの皮などがおもな産物でした（『蝦夷商賣聞書』）。

1808年ころの産物としては、フノリ、コンブ、ブリ、タラ、カスベ（エイ）、カレイ、サメの皮、アツシ（アットウシ：木の皮のせんで作った服・布）などがあります。オシラベツ（音調津：広尾町）、ピロウ（広尾）などではコンブがとられ、タンネイソ（タンネソ：広尾町）では、フノリがとられていました（『東蝦夷地各場所様子大概書』）。

さらに、1854～1856年ころには、サケ、マス、イワシ、ブリ、煮たナマコ、コンブ、フノリ、シカの皮、クマ（の皮？）、ワシ、材木〔モミ・エゾマツ・ツガ〕（『松前蝦夷地場所請負制度の研究』『蝦夷行程記』）などが、トカチ場所の産物として記録されています。

## 生活の一部となる「やとわれ仕事」

アイヌの人々にとって、和人と交易は大切なことです。その交易相手の和人が、ものだけではなく「やとわれ仕事（労働）」を求めるようになりました。

強制され、どれいのようにあつかわれることもあり、それほどでもない場合でも、かなり安くやとわられていたようです。

やがて、和商人のもとで仕事をするのが、多くのアイヌの人々にとって、生活の一部となっていきました。

した。

あまりひどい支配がおこなわれない「場所」では、春から秋にかけて、若者や働きざかりの男女が、海岸の漁場などへ「やとわれ」に出ます。そして、秋から冬にはコタンに帰り、動物の狩りをおこなう、という生活のサイクルができあがっていったようです。

「やとわれ仕事」の期間、内陸のコタン（集落）には、老人と子ども、それに母親らが残されていました。

1 ノッカマップ：アイヌの人37人が処刑された、根室半島のノッカマップでは、昭和49年（1974）から毎年、アイヌの人たちが中心になって「イチャルバ」という供養祭（くようさい）をおこなっている。クナシリ（国後島）を見わたす海岸の丘にイナウ（カム

イ（神）にささげる木製の祭祀具（さいしぐ）が立てられ、伝統的な方法によっておこなわれる。この翌日、「飛騨屋の71人はアイヌの人々を苦しめた者たちだが、犠牲者（ぎせいしゃ）には変わらない」として、和人に対してイチャルバがおこなわれる。

# 「探検」される十勝

国際理解

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



1800年、皆川周太夫が十勝川をのぼってきて上陸した場所。旧帯広川・パラプト(帯広市東10条南4丁目)。

17世紀、ロシアは清(今の中国)との戦いに敗れ、サハリンへの南下をいったんあきらめ、シベリアを東に進みカムチャツカにまで領土を広げました。そして、18世紀中ごろには、千島列島南部にまで南下してきています。

これを知った江戸幕府は、北海道を対ロシアの前線と見なして、北海道、千島列島の調査を始めます。

また、1799年から北海道の太平洋側を、1808年には北海道全体を直接支配するようになりました。

1807年には、エトロフ(択捉島)で幕府兵(南部・津軽藩士)とロシア人が武力衝突しています。

1821年、北海道は松前藩支配にもどりませんが、1854年、再び幕府が直接支配し、幕府がたおれるまで続きます。

名前	十勝に来た年
最上 徳内	1786
近藤 重蔵	1798
渋江 長伯	1799
伊能 忠敬	1800
皆川周太夫	1800
磯谷 則吉	1801
今井八九郎	1828
松浦武四郎	1845・1856・1858
窪田 子蔵	1856
成石 修	1857

## 探検家たち

1785年から幕府の北海道調査が始まります。

1785～86年には最上徳内が、日高・十勝・釧路・厚岸・国後島・択捉島・ウルップ島にやってきました。彼はアイヌの人の生活にだけこみ、1791年にはアイヌ民族救済のために、再びやってきます。

日本の測量で有名な伊能忠敬は、1800年に函館から十勝・釧路までの海岸線を測量していきました。

同じく1800年には皆川周太夫が虻田を出発し、大津(豊頃町)から十勝川をさかのぼって、内陸を調査しました。帯広にも寄っていて、パラプト(旧帯広川・水光園近く)で上陸し、アイヌの人の家に泊めてもらっています。その後、ニトマップ(人舞・清水町)から山をこえて、日高地方の沙流川上流に出ていきました。

幕末に十勝をおとずれたおもな探検家や旅行者。

## 幕末最大の探検家「松浦武四郎」

1845～1858年までの間に、6回も北海道を旅したのが、松浦武四郎です。十勝へもきて、十勝川や歴舟川ぞいなどを歩き調べています。「北海道」という名前を考えた人です。

アイヌ女性に当時貴重だった針をプレゼントするなど、心配りをする人で、アイヌの人々に信頼され、アイヌ文化をよく理解した人でもありました。アイヌに対する和人のひどい支配もふくめて、北海道について細かく記録を残しています。

これら「探検家」は、見方を変えれば、アイヌ民族が暮らす土地に入りこんできた人たちです。

彼らは、アイヌの人々に案内をたのみ、地名や情報を教えてもらうほか、川を行き来する時はチッ(丸木舟)に乗せてもらい、夜にはチセ(家)に泊めてもらうなど、さまざまな手助けをってもらうことで、調査をすることができたのです。



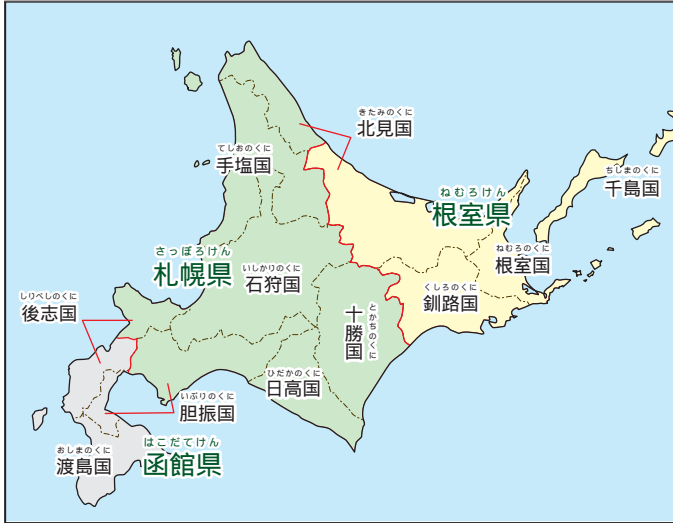
松浦武四郎による十勝の図。十勝川河口からヤムワッカヒラ(幕別本町)のあたりまで。(『東西蝦夷山川地理取調図』より)

1 松浦武四郎(まつうらたけしろう): 心配りがある上、何よりその人がらがよかったようである。相手のすぐれたところを素直に尊敬し、理にかなっていれば同行した和人の役人よりもアイヌの長(おさ)の意見をとり、体調が悪くても宴会につきあい、お礼

を忘れず、やとった案内人に対しても思いやりをもって意見を尊重する。同時に、するどい観察力があり、わずかな滞在記録の中から当時の問題点がうかび上がってくる。記録・報告書には、あたたかみやユーモアがあり、すぐれたエッセーともなっている。

かいたくしゃ

# 開拓者をむかえ入れるアイヌ民族



明治2年(1869)、北海道は11国に、明治15年(1882)からは「札幌県」「函館県」「根室県」の3県に分けられた。1つの「国」が別の県に入っている。

江戸幕府がたおれ、1868年、明治新政府ができます。明治2年(1869) 十勝は静岡藩・一橋家・田安家などの支配地となり、明治4年(1871)には、北海道全体が「開拓使」の管理地となります。

明治15年(1882)には開拓使がなくなり、十勝は「札幌県」の一部になります。明治19年(1886)、北海道全体が「北海道庁」の管理下に置かれました。( p156)

こうした中で、本州からの和人が海ぞいの大津(豊頃町)などに移住し、さらに十勝の内陸に移住を始めます。

明治12年(1879)には、馬場猪之吉がオベリベリ(帯広市)の長であるモチャロクのところに仮住まいしたあと、モッケナシ(音更町)に移住しました。( p158)

## 開拓者を助けるアイヌの人々

明治16年(1883) 依田勉三・鈴木銃太郎・渡辺勝に率いられた「晩成社」が13戸27人とともに集団でオベリベリ(帯広市)に移住、林を切り開いて農場づくりを始めます。

当時はまだ、十勝川などの川が交通路の中心で、陸にはふみわけ道があるくらいでした。晩成社の人もほかの移住者たちも、大津との間は、十勝川を舟で行き来します。

この舟は、アイヌの人があやつる「チブ(丸木舟)」でした。

アイヌの人々は、こうした交通のほか、道案内、入地当初の家や食べ物など、開拓者たちが暮らしを始めるのに必要なものや情報を、ある時は好意で、ある時は労賃と引きかえに、あたえたのです。( チブ p128)( 移住者 p158)



アイヌの人があやつるチブ(丸木舟)に乗って川をのぼる開拓者。(蓋派(池田町大森)に入植した、上徳善七が描かせたもの) (上徳善司氏蔵)

## アイヌ民族と晩成社

晩成社は火事を起こすなどして、オベリベリのアイヌの人々ともめもします。しかし、その後、おわびの宴会をするなど、うまくつき合っていくことになりました。

幹部の一人、鈴木銃太郎は、アイランゲ、ウインコトレらのアイヌの人たちと仲良くなり、サケやマスをもったり、米をあげたり、農場の手伝いをしてもらったり、酒を飲んだりと、深いつきあいを続け、アイヌの女性と結婚します。

サケが禁漁となったため、アイヌの人々が食べるものに困った時には、銃太郎と渡辺勝が調査し、当時大津にあった役場や札幌県に「アイヌ救済」をうったえもします。( p146)

それとともに、アイヌ民族への農業指導などもおこない、共に生きていく方法をさぐりました。( p147)



晩成社幹部の一人、渡辺勝の家があったところ(帯広市東10南5)。勝の妻カネは、同じく晩成社幹部だった鈴木銃太郎の妹だった。(市民大講堂・東小地区コミュニティ講座「帯広発祥の地めぐり」)

2 アイヌ民族と晩成社(あいぬみんぞくとばんせいしゃ): 晩成社の幹部たち、とくに鈴木銃太郎と渡辺勝・カネは、キリスト教徒でありインテリでもあった。当時の日本や世界の情勢からすると、アイヌ民族も近代化しないと民族として生きていけない、と考

えていたと思われる。しかし、開拓の進行や近代化自体がアイヌ文化をこわし、民族の危機をもたらすことまでは想像できなかった。その後、晩成社の経営はほとんどが失敗に終わってしまう。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

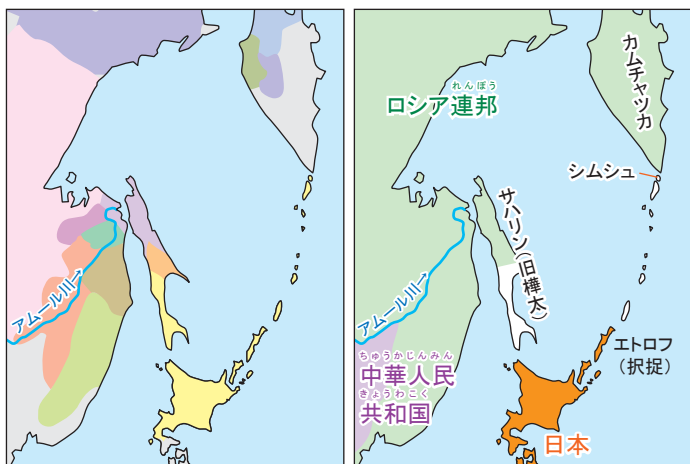
第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

# 5. アイヌ文化の危機、そして新たな発展

## ① アイヌ文化の否定



アイヌ民族の土地(黄色)と、ほかの北方民族が住む土地ごとの色分け。  
 (『アイヌの歴史と文化 I』より、改変)

欧米の国々からの圧力をきっかけに、江戸幕府がたおれ新政府ができ、1868年、明治時代に入りました。

日本は、ロシアの南下政策に対抗し、「蝦夷地」を「北海道」としてはっきりと領土化します。アイヌ民族は、日本とロシアという、近代化につき進む二つの国の国づくり(とその争い)にまきこまれました。

日本政府は、これまで、別の民族が暮らす場所としていた北海道を、完全に「日本化」しようとした。

これは、アイヌ民族の文化を否定することになります。豊かな北海道の自然と共にあったアイヌ民族の暮らしを、「未開地」の「野蛮な生き方」と決めつけ、北海道を開拓することで「近代化」しようとしたのです。



小玉貞良画の「アイヌ章魚突の図」(部分)。男女とも「イヤリング」をつけている。  
 (天理大学附属天理図書館蔵)

### 風俗や名前の否定

明治4年(1871)、「戸籍法」ができます。それに合わせ、北海道を管理していた役所である「開拓使」によって、伝統的なアイヌ文化であった「亡くなった人の家を燃やすこと(カソマンテ：死者に家を持たせる儀式)」「女性の入れ墨」「男性のイヤリング」などが禁止され、日本語とその文字を覚えるよう強制されます。

さらに明治9年(1876)ころには、アイヌ文化にはなかった名字をつけるよう強制され、名前も和人風につけ直すよう指示されます。

すべてが一気に進んだわけではありませんが、アイヌ文化、そしてアイヌ民族としての存在が否定され、一方で、多くの和人が持っていた「差別する気持ち」が強まっていきました。

### 土地もうばわれる

アイヌ文化では、家の土地や畑など以外、山菜・木の実とりや狩りをする山野は、だれかが「所有する」ものではなくて、個人やコタン(集落)などが「利用する」ところ(イオル)でした。

しかし、開拓使は、北海道のすべての土地を、和人の私有地と日本国の土地(国有地)とにします。明治10年(1877)には改めて、アイヌの人々が持つ家や農地までを、開拓使の管理地にします。

アイヌ民族が、独自の暮らしをつくり上げてきた北

海道の大が、基本的に和人の土地とされてしまったのです。

国際理解

第1章 十勝の平野や川がてら

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

※1 領土化(りょうどか)：江戸時代末、1855年の「日魯通好条約(にちろつうこうじょううやく)」によって、エトロフ(択捉)島とウルップ島の間に国境となった(樺太(からふと)：サハリン)に関しては確定されなかった。明治8年(1875)の「樺太・千島交

換条約(からふとちしまこうかんじょううやく)」により、樺太はロシア領に、シムシユ島以南の千島列島が日本領となった。千島アイヌの人はどちらかの国籍を選ばされ、それぞれ移住させられて故郷と伝統をうばわれ、命を失う人も出た。

# 乱獲と大雪によるシカの「絶めつ」



(上)しかけ弓「アマツボ」(帯広百年記念館: 2)。  
(右円内)「トリカブト(スルク)」の花。根から矢にぬる毒を取った。

必要な分だけとるアイヌ文化とちがい、和人的な商売を目的とした狩りが進むと、シカ(ユク)がどんどんとられます。北海道のシカは減っていきました。

そのため、開拓使はシカのとりすぎ(乱獲)を防ぐと、明治8、9年(1875、76)に規則を定めましたが、乱獲は続きました。

この規則では、伝統的なアイヌ民族の狩りの方法である「しかけ弓」と「毒矢」が禁じられています。ここでも、伝統的なアイヌ文化が禁じられたのです。

一方、石狩地方の開発が進むにつれ、シカは十勝に集まるようになりました。



エゾシカ(ユク)。先に石狩地方が開発されていったため、十勝にシカが集まり、さらに和人のハンターらが集まることとなった。

## 十勝組合の管理と和人の密猟

明治始めまで、十勝の産業(狩りや漁)については、商人による支配・管理が続きました。アイヌの人たちは商人に獲物売り、あるいは漁場などにやとわれていました。

開拓使は、北海道各地の商人支配をやめていきます。しかし十勝では、ただ商人支配をやめるだけだと、アイヌの人々がそれまでの暮らしを成り立たせられなくなります。また、開拓使も、宿や道の管理者がいなくなるので困ります。

明治8年(1875)に商人幹部6人とアイヌの代表7人とが「十勝組合」をつくりました。

十勝組合はシカ狩りや漁を管理し、発展しました。

しかし、十勝のシカについて知った和人がきて、大がかりな密猟をします。明治10年(1877)までのシカ狩り頭数は、年に1万頭弱だったのが、次の年には4万頭も狩られました。十勝のシカは減っていきました。

## 大雪によるシカの大量死

シカの数が減っていく中で、明治12年(1879)1、2月に大雪が降り、エサをとれないシカが大量に死にました。

和人の狩りは開拓使により禁じられましたが、守られません。

さらに、明治13年(1880)に十勝組合が解散し管理が弱まると、和人のハンターや毛皮商人が入りこみ、あたりまえのように密猟がおこなわれました。( p158)

明治15年(1882)の早春に、また大雪が降りました。雪に足をとられたシカは、ハンターに殺されたり飢え死にしたりして、とても少なくなり、絶めつ状態だとまでいわれます。

エゾシカという、アイヌ文化を支えてきた大きな柱が、あっという間に少なくなってしまったのです。



冬のエゾシカ(ユク)。川に落ちてはい上がるうともがいている。  
(写真: 『十勝川写真で綴る変遷』より)

2 帯広百年記念館(おひひろひやくねんきねんかん): 帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155 - 24 - 5352 月曜日休館  
3 密猟(みつりょう): 法律などのきまりを破って狩りをする事。

4 絶めつ状態(ぜつめつじょうたい): 明治20年(1887)には、北海道全体で1千800頭しかとれなくなった。

# 川でのサケ漁の禁止

地域産業  
環境

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん



(上) 旧十勝川(今の浦幌十勝川)、十勝太(浦幌町)でのサケ漁。明治の終わりころ。

(『十勝国産業写真帖・北海道庁』より)



(右) サケの採卵・受精(札内ふ化場)。今では、漁師さんなどによるふ化、放流によって、サケは増えてきた。



マレク( p120)によるサケ漁(昭和初期撮影)。(写真:木下清蔵写真資料より 財団法人 アイヌ民族博物館蔵)

明治始めまでの「トカチ場所」の商人支配、明治10年(1877)からの「十勝組合( 145)」による漁場開発や管理、さらに、その後の漁場解放によって、河口や沿岸の漁業は発展します。漁業の発展とは、サケなどの魚やコンブなどをたくさんとれるようになることです。

サケは川で生まれ、北太平洋で育ち、また生まれた川に帰ってきて卵を産み、一生を終ります。

河口でサケをたくさんとるということは、川に帰ってきたサケを減らすことであり、サケの産卵をジャマすることでもあります。

かつてのアイヌ文化では、まずありえなかった「とり過ぎ(乱獲)」がサケ漁でも起き、サケの数が減っていました。

## サケの禁漁

サケが河口などでとられすぎるから、川で産卵するサケが減り、新たなサケが減る。しかし、漁業とその商売は発展させたい。

川をのぼったサケの漁が、制限されるようになりました。もともと、内陸で暮らすアイヌ民族にとって、川をのぼるサケは大切な命のもとでした。自然のバランスをこわさないで、ずっと長い間暮らしてきていたのです。( p135)

和人の文化がそのバランスをこわしたのに、「ツケ」をアイヌの人々にはらわせることになったのです。

明治16年(1883) 札幌県( さっぽろけん ) 十勝川をのぼったサケの漁を禁止し、鉄砲を持った監視員を送ってきました。

## 飢えるアイヌの人々

アイヌの人々は、秋にとったサケを1年分の食べ物としていました。それがとれなくなったのですから、大変困り、飢え死に寸前に追いこまれる人も出てきました。

晩成社( p143)の人が大津の役場とかけ合いますが、わずかな米しか配給されず、木の皮を食べる人までいたといいます。大発生したバツタを駆除する仕事で、飢えをしのいだ人もいたようです。

明治17年(1885)、晩成社のうったえもあり、札幌県は一時的に禁漁をゆるめ、アイヌの人々は一息つきます。

しかし、シカ猟に続いて、アイヌ文化を支える大きな柱である「川でのサケ漁」が、基本的にできなくなってしまったのです。



(上) 明治30年代末の晩成社小作人の家(帯広市・水光園の近く)。(『十勝川写真で綴る変遷』より)



(右) 晩成社が入植したあたりの今のようす。(帯広市・水光園)

1 漁場解放(ぎょじょうかいほう): 十勝組合は、新しく和人が漁場をつくることを制限していた。十勝組合が解散することで、和人による漁場づくりが進んだ。  
2 河口(かこう): このころは、漁業としてのサケ漁も、おもに川の最下流部から河口

までの間でおこなわれていた。  
3 札幌県(さっぽろけん): 明治15年(開拓使はなくなり、北海道は、札幌県・根室県・函館県の3つの県に分けられた。十勝は札幌県にふくまれた(ただし足寄郡は根室県)。



## 晩成社とアイヌの人々とサケ ... 助けてもらい、手助けをした

しもおびひろむら おびひろし にゅうしよく ばんせいしゃ  
 下帯広村（帯広市）に入植した晩成社とアイヌの人たちとの、サケやマスを通したかわりを、晩成社幹部（依田勉三・鈴木銃太郎・渡辺勝）による、日記や記録の中から見てみましょう。（やさしいことばに直してあります）

明治15年（1882）、鈴木銃太郎は開拓準備のため、一行より先に帯広で一冬をこします。その時の日記から。

### 明治15年8月4日

アイヌの子どもに青貝ポン（ポタン）をあげて、白米を5合（約0.9リットル）をあげる。その子が、ゴボウを持ってきてくれる。釣り針、糸などをあげる。彼がまたやってくる。マスのくんせいをくれる。みそをあげる。元小屋のアイヌの女性、マス半身をくれる。米を5合あげる。

### 10月14日

夜、シモコツといっしょに、トレツ（人名）の家に行く。みやげに大根菜カブを少し持って行く。ここで、ドブロク（にごった酒）と秋ザケをごちそうになる。

帰りにモチャロク（村長の名前）の家に立ち寄り、秋ザケ半身をもらう。

### 10月19日

早朝、エトラスとアイランゲ（人名）が、それぞれ秋ザケを持ってきてくれた。かわりにアイランゲがほしいといったみそ一椀とソバをかり取ってあげる。

### 12月4日

昨夜、アイヌのタカサルが泊まっていった。タカサルは、サケ15本を持ってきてくれた。干すための場所をつくる。一椀（ご飯？酒？）ふるまう。（鈴木銃太郎の日記より）

翌、明治16年（1883）春、晩成社の一行がやってきて、本格的な移住が始まります。ところが、晩成社の人間が火事を起こし、アイヌの人たちとの間によくはない空気がただよみます。晩成社の報告書と渡辺勝の日記からです。

### 明治16年5月11日

開墾のために野に火をつけ、あやまって、アイヌの人の倉庫を燃やしてしまった。（『北海道晩成社第二回報告書』より）

### 5月15日

アイヌの人たちは、私たちが入地するのを見ると、おそれ、先を争ってどこかに去り、ただ村長のモチャロク一家だけがふみとどまっている。（中略）自分たちはアイヌの人を守り、いろいろ教え、いっしょに開拓する

ことを希望するのみだと、村長を通じて伝えてもらった。（渡辺勝の日記より）

何とか、関係は良くなりますが、今度はサケの禁漁が決まります。次も、報告書と勝の日記からです。

### 11月26日

札幌勤業課の役人が来た。下帯広村（帯広市）に宿泊して、十勝川上流（河口近く以外のこと）でサケをつかまえることを禁じ、また、2人の見張りを置いたので、アイヌの人はもちろんのこと、晩成社の社員まで迷惑している。（『北海道晩成社第二回報告書』より）

### 明治17年

昨冬、役人からサケをつかまえることを禁じるとの命令があったため、アイヌの人たちはだんだんと食べものがなくなり、飢饉が目の前にせまり、ただ、何もできず死を待つかのようである。（渡辺勝の日記より）

### 同じ年

大津（の役場）に行き、助けをたのんでも、1戸につき、わずかに8升（約16.4リットル）米で約12kgしかもらえず、往復の料金にしかない。家に着けば、妻は病気になる、子どもは飢え、どうすることもできず、最後は木の皮を食べようになっている。（渡辺勝の日記より）

### 同じ年

アイヌ民族の村が飢饉である。（中略）応急の救助をして、一方で札幌県に申し立てた。（渡辺勝の日記より）

### 明治18年2月

アイヌの人は、去年と同じように飢えている。これは、サケをとれないためである。（『北海道晩成社第四回報告書』より）

晩成社の申し立てのためか、さすがにこのままではいけないと思ったのか、札幌県は応急にサケの禁漁をゆるめることになりました。

### 明治18年12月

アイヌの人は、サケをたくさんとれたため、食べもの不足もなく、大変喜び、落ち着いたようすを見せている。（『北海道晩成社第四回報告書』より）

「帯広百年記念館 博物館講座 晩成社とアイヌの人びと」から

鈴木銃太郎の日記は「十勝開拓の先駆者 鈴木銃太郎日記とその人々（田所武敏著）」より  
 渡辺勝の日記は「音更然別の開拓者渡辺勝翁日記抄（三原武彦編）」より

4 晩成社（ばんせいしゃ）：明治16年（1884）、伊豆（いず：静岡県）から下帯広（帯広市）に入植し、開拓を目指した農事会社。  
 5 くんせい（燻製）：肉や魚をけむりでいぶし、長持ちするようにしたもの。（かおりや

味をつけるためにもおこなわれる）  
 6 飢饉（ききん）：農作物などがあまりに不作なため（この場合はサケの禁漁のため）食べ物が少ない、人々が飢（う）え苦しむこと。

# 農民化と「保護」そして農地改革

地域産業  
環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

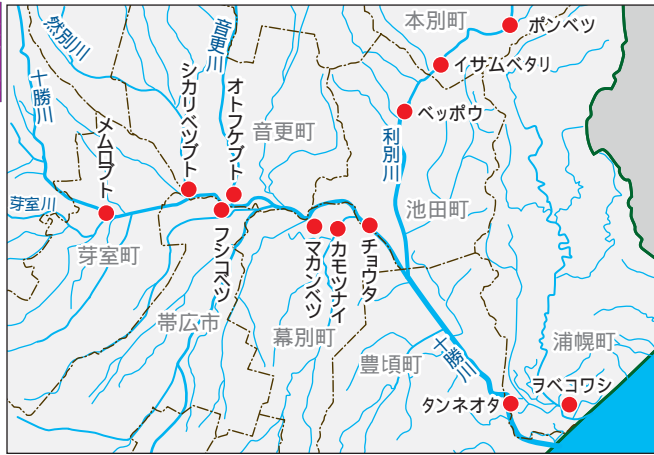
第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



札幌県によってアイヌの人への農業指導がおこなわれたところ(おおまかな位置。地図は今のもの)。

文化が否定された上、サケ漁やシカ猟という生活の柱もうばわれたアイヌ民族は、場合によっては生きることすら困難になりました。

明治16年(1883)、根室県は中足寄(足寄町)で、飢えや生活苦からの救済などを目的に、アイヌの人たちに対する農業指導をおこないました。

明治18年(1885)には、札幌県も、十勝各地でアイヌ民族に農業指導する事業を始めました。

十勝の指導リーダーは梅野四男吉で、そのほか宮崎濁卑などの和人の指導者(勸農係)5人と、モチャロクなどのアイヌの村長6人が力を合わせて、アイヌの人たちに農業指導することになりました。

## 4年で終わった農業指導

畑を開く場所は、「アイヌの人が好むところ」「水害にあわないところ」「交通の便があるところ」「土が肥えたところ」「用水がいいところ」「暖かいところ」「マキが手に入るところ」を考えて、十勝川と利別川ぞいに12ヵ所が決められました。

このため、アイヌの人々が住むところは大きく変わることになり、十勝川上流のコタンからは、しばらく人がいなくなりました。

明治21年(1888)には、264戸が合わせて200町歩あまり(およそ200畓 = 2km<sup>2</sup>)を開きましたが、この年で事業は終わりました。

アイヌの人々は、この事業によって一時的に農業にたずさわりましたが、多くの人は農業になじまず、狩りや漁場でやとわれる生活にもどりました。



アイヌの人の農業指導に使用された中足寄の建物。(明治18年建築) (写真:『足寄町史』より)

## 「保護」は、おしつけだったのか

アイヌのハンターの話では、「山は豊かな場所であり、迷って遭難するような場所じゃない」ということです。

アイヌの人たちにとって、生きる基本は、川や海で魚をとり、山野で植物採集や狩りをすることです。そして、農耕はそれをおぎなうものでした。

札幌県などは、アイヌの人たちを「保護」しようとしてきました。

しかし、それは、アイヌ民族の生活する川や山野をうばった上で、農業を中心とした暮らしをさせ、お金も受けをさせることです。つまり、アイヌ文化を否定した上で、和人数させることでした。

相手の文化や考え方を尊重しない「保護」は、ただの「おしつけ」に過ぎなかったのかも知れません。



アイヌの人々が山に向かうようす。アイヌのハンターにとって、山は豊かな場所であり、迷って遭難することは、まずなかったという。

(平澤屏山『蝦夷人山越えの図』 函館市中央図書館蔵)

1 根室県・札幌県(ねむろけん・さっぽろけん): 明治15~18年、北海道は札幌県・根室県・函館県の3県に分けられていた。また、明治時代から戦後まで、足寄郡(今の足寄町東部と陸別町)は、釧路地方の一部であった。そのため、足寄郡は根室県に、そ

他の十勝は札幌県に入れられていた。( p156・p157・p143)

2 中足寄で(なかあしよるで): アイヌの人々は、ほかのコタンから中足寄に集められた。しかし、他地域の人となじまなかつたり、病気がはやったりしたため、次の年(明治17

開拓者がやって来る

十勝組合や、また、おしつけとはいいながらも、開拓使や札幌県などは、アイヌ民族に財産と農地としての土地を残し、あたえようとしてきました。

明治25年(1892)ころから、和人の開拓者が増え始めます。そして明治29年(1896)、殖民地貸し付けが始まり、一気に開拓者が押し寄せます( p162)。

多くのアイヌの人たちは、複雑になった産業としての農業になじめないため、自分の土地を開拓者たちにとても安く貸してしまい、土地を失っていきます。

明治32年(1899)になると、「北海道旧土人保護法」ができ、アイヌ民族に対して教育や医療を保証し、また、新たに農地をあたえることになりました。



大正10年(1921)の帯広伏古コタンのチセ(家)(帯広市北)。

(写真:帯広百年記念館蔵: 3)

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

所有権すらうばった「農地改革」

「保護法」であたえられた土地は、すでに開拓者がいいところを取ったあとなので、斜面であったり、ほとんど河原であったりと、多くが悪い土地でした。

さらに、その中でも多少ましな土地は、ずるい和人によって、とんでもなく安く借りられ、耕作権がうばわれます。

昭和20年(1945)、太平洋戦争に日本が負け、政治改革がおこなわれ、「農地改革」がおこなわれます。実際には農業にかかわっていない「大地主」から、農地を借りて耕作をおこなってきた「小作人」に、農地を分けることになったのです。

土地を持っていた多くのアイヌの人たちが、この「農業にかかわっていない大地主」と見なされました。かろうじて残っていた「アイヌの土地」の多くが、和人の土地になっていきました。( p185)



上士幌町の東泉園は、アイヌ民族が持ち続けることができた数少ない土地の一つ。

農業経営に成功したアイヌの人もある ... アイヌ教育にもつづいた伏根弘三

例えば、伏根弘三(アイヌ名:ホテネことチャンラロ; 1874~1938)は宮崎濁卑らについて農業を学び、開拓事業に力を入れ、30人の和人を使って農業経営に成功しました。

弘三は、アイヌの人たちが土地を和人の手によって失っていくのにも心を痛め、民族の団結、禁酒、教育の大切さをうたえます。

アイヌの若者を援助して、函館の学校に入学させます。また、明治34年(1901)には帯広市街の自宅に子どもを預かり、和人教師をまねいて塾をつくります。

さらに、函館・札幌・小樽などをまわって援助を受け、明治35年(1902)、伏古(帯広市北)に教育所をつくりました。その土地、校舎、器具などは自分の財産を使って提供しました。

さらに全国をアイヌの仲間とまわって、寄付を得て、教育所を続け、明治37年(1904)には、公立の第二伏古尋常小学校の設立にも成功しました。

そのほか、上京して「保護法」の改正をうたえるなど、アイヌ民族の暮らしをよくし、権利を取りもどすため、努力をし続けました。

年(1884)からは、それぞれが希望する土地で農地づくりがおこなわれた。さらに次の年には中足寄に出張所ができ、指導・保護が続けられたが、明治22年(1889)に出張所が廃止されると、多くが農業からはなれた。

3 帯広百年記念館(おびひろひやくねんきねんかん): 帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155-24-5352 月曜日休館

# アイヌ文化の新たな発展



幕別町蝦夷文化考古館は、吉田菊太郎さんが先祖の残した民具や宝物を保存しようと、昭和34年(1959)につくり上げた資料館。(151ページ)

こうして伝統的なアイヌ文化は、北海道の「日本化」が進む中で否定され、和人のバカげた差別もあって危機をむかえました。

しかし、そんな中でもアイヌ民族の生活を守り、伝統的な文化を残していこうという人々が、努力を続け、手をにぎりあっていきました。

団結・教育・禁酒を説く、農産物の保存を広める、塾や学校を作る、「保護法」の改正を政府などにうたえる、ウポポ(歌)やリムセ(おどり)、ムツクル、トゥイタク(昔話)を伝える、アイヌ文化財を集めて保存し復元する、伝統的な生活や祭り・カムイノミなどの儀式を続ける、アイヌ民族の現状を広くうたえる、伝説や地名を研究する、団体をつくる、政治家になる、などいろいろな角度から、アイヌ文化が守られてきました。( p149)

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん



十勝にとどまらず、全国各地でアイヌ文化を表現し続ける「帯広カムイウポポ保存会」。「2005イオルフォーラム」での公演。

## アイヌ文化振興法

平成9年(1997)、問題の多かった「保護法」にかわって、「アイヌ文化振興法」が制定されました。

これは、「アイヌ文化をさかんにし」「伝統などに関する知識を広め」「アイヌの人々の民族としての誇りが尊重される社会を実現しよう」とする法律です。

自分が慣れた文化だけを「十勝の文化」「日本の文化」とするのではなく、アイヌ文化も和人の文化も、さまざまな地方文化、新しい文化、古い文化も(さらには移住してきた外国の人の文化をも)尊重し、育てていくことが、豊かな暮らしをつくっていくことになるのではないのでしょうか。

## 「イオル」の再生

「イオル」とは、もともと、コタン(集落)を中心とした、魚とりや狩り、植物採集をおこなうための地域のことをいいます。

そうしたアイヌ民族の生活を支えてきた自然環境に加えて、伝統的な儀式や伝説など心の文化もふくめた「伝統的な暮らしの場」を守り、伝え、育てていくことを「イオルの再生」と呼んでいます。

このイオル再生のために、白老町を中心として、平取町・新ひだか町・札幌市・旭川市・釧路市、それに十勝が「地域イオル」として選ばれました。



上士幌町・東泉園では、上士幌ウタリ文化伝承保存会の人たちが、儀式、漁、工芸、アイヌ植物園など、さまざまな面からアイヌ文化を守っている。

1 アイヌ文化振興法(アイヌぶんかしんこうほう):正式には「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓蒙に関する法律」。

## 使われてきたさまざまな民具... 幕別町蝦夷文化考古館

幕別町文化考古館は、吉田菊太郎（アイヌ名アリトムテ：1896～1965）さんが、晩年、アイヌ民族の伝統的な道具や着物が身近なところから消えていくのを悲しみ、先祖が残した民具や宝物を保存しようと、つくった資料館です。昭和34年（1959）のことでした。

菊太郎さんは、チロツトコタン（幕別町）のリーダーであり、十勝の、そして北海道のアイヌ民族の指導者でもありました。蝦夷文化考古館では、アイヌの人たちが実際に使っていた、うるしぬりのシントコやイタンキなどの器、チタルペ（ゴザ）、刀、弓矢、マレク、チブ（丸木舟）、衣服... といったさまざまな生活用品や宝物、それに写真などを見ることができます。

昭和40年（1965）に菊太郎さんが亡くなると、遺族の方が建物と収藏品すべてを幕別町に寄付しました。

そのほか、各市町村の博物館などでも、アイヌ文化に関する展示を見ることができます。

帯広百年記念館には、アイヌ民族文化情報センター「リウカ」があり、本やビデオなどに記録された映像、音、あるいは遊びなどを通して、アイヌ文化にふれることができます。



アイヌ民族文化情報センター「リウカ」（帯広百年記念館）。リウカとは「橋」の意味。



幕別町蝦夷文化考古館の展示。



幕別町蝦夷文化考古館の展示。



幕別町蝦夷文化考古館の位置。幕別町字千住

### 十勝のアイヌ民族に関する口承と記録... 語り伝えと文字

かつての伝統的なアイヌ社会では、語り（口承）によって歴史が伝えられ、文字による記録は残されていません。伝わるうちに、少しずつ変わることもあるでしょう。

一方、当時のできごとについて文字で記録されたものは、和人が外国人のものになります。どんな観察者でも、自分の社会の見方にしばられ、また、自分（たち）に都合よく記録することがあるので、記録を見る時には注意が必要です（現代の本、教科書やこの本でもそうです）。

ソバウスとその子中村要吉（イベツカレ）など、アイヌの人の語り伝えによると、およそ400年くらい前、十勝内陸部には、古くからの一族（村長：チパイコロ）が帯広に、北見系の一族（村長：シャガニ）が音更に、そして石狩系の一族（村長：モザルク）が札内にいたとい

ます。（『帯広市史 平成15年編』より）

文字による、十勝のアイヌ民族についての最も古い記録は、オランダの探検家フリースの『日本北東航海旅行記』にあります。

1643年、オランダ東インド会社のフリースが指揮する船カストリクム号は、日本周辺の金・銀を調査中でした。

フリースたちは十勝沖で停泊中、少年1人をつれたアイヌの男性2人の舟に出会いました。

記録によると、「彼らは北西を指し、自分たちはそこに住み、そしてそこはタカブチと」と教えてくれます。また、「彼らはあらい麻布を着、その上の衣服は毛皮製であった」と記されています。（『1643年 アイヌ社会探訪記（北構保男）』より）

2 帯広百年記念館（おびひろひゃくねんきねんかん）：帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155-24-5352 月曜日休館  
3 リウカ：アイヌ語で「橋」の意味。

4 文字（もじ）：文字は、支配者が生まれることによって必要とされるといわれている。現在、日本には文字によるさまざまな文化が生まれているが、もともと日本には独自の文字はなく、基本的に中国の漢字を輸入して利用した。かなも、もとは漢字である。

参考となる本など (順不同)

くわしい参考・引用文献 → p255



「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」

- 「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館 編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会、2004
- 「アイヌ植物誌」福岡イト子・佐藤寿子、草風館、1995
- 「アイヌ文化の基礎知識」アイヌ民族博物館 監修、草風館、1993
- 「ジュニア版 北海道の歴史」榎本守恵、北海道新聞社、1983
- 「アイヌ、神々と生きる人々 (小学館ライブラリー)」藤村久和、小学館、1995
- 「アイヌ・暮らしの民具」菅野茂・清水武男、クレオ、2005
- 「聞き書 アイヌの食事」萩中美枝・藤村久和・村木美幸・畑井朝子、農山漁村文化協会、1992
- 「CDエクспレス アイヌ語」中川裕・中本ムツ子、白水社、2004
- 「ボン カンピソシ 1～9」北海道立アイヌ民族文化研究センター、1996～2004
- 「北海道の地名」山田秀三、草風館、2000
- 「北の生活文庫 第2巻 北海道の自然と暮らし」北の生活文庫企画編集会議、関秀志・矢島睿・古原敏弘・出利葉浩司、北海道新聞社、1997
- 「改訂増補 アイヌ伝承と砦 (チャシ) 北方新書007」宇田川洋、北海道出版企画センター、2005
- 「帯広市開拓120年記念事業 120年より前の帯広 パンフレット」帯広百年記念館、2002
- 「十勝川の川舟文化史 濡標」十勝川川舟文化史「濡標」編集委員会、十勝川川舟文化史「濡標」刊行会、2004
- 「帯広市史 (平成15年編)」帯広市史編纂委員会、帯広市、2005 など各市町村史・郷土史
- 「全国の伝承 江戸時代 人づくり風土記 聞き書きによる知恵シリーズ (1) ふるさとの人と知恵 北海道」組本社 企画・編集、農山漁村文化協会、1991
- 「アイヌの歴史と文化 I・II」榎森進 編、創童社、2003・2004
- 「新 北海道の古代 2 続縄文・オホーツク文化」野村崇・宇田川洋 編、北海道新聞社、2003
- 「新 北海道の古代 3 擦文・アイヌ文化」野村崇・宇田川洋 編、北海道新聞社、2004

参考となるインターネット・ページ

くわしい参考・引用ページ → p256

アイヌ文化・アイヌ語

- 「帯広百年記念館 アイヌ民族文化情報センター リウカのページ」<http://www.museum-obihiro.jp/index.shtml>
- 「アイヌ民族博物館のページ」<http://www.ainu-museum.or.jp/>
- 「アイヌ文化振興・研究推進機構のページ」<http://www.frpac.or.jp/>
- 「アイヌ語ラジオ講座のページ (二風谷方言)」STVラジオ <http://www.stv.ne.jp/radio/ainugo/index.html>  
<http://www.h3.dion.ne.jp/~oyama/boukenn-folder/bouken-ainugo-ziten.htm>

安藤氏と十三湊「五所川原市の文化・史跡案内のページ」五所川原市商工観光課

[http://www.goshogawara.net.pref.aomori.jp/16\\_kanko/bunka.html](http://www.goshogawara.net.pref.aomori.jp/16_kanko/bunka.html)

チッ (丸木舟)「伝統の丸木舟完成『WEEKLY NEWS (1994年4月4日)』のページ」十勝毎日新聞社

[http://www.tokachi.co.jp/kachi/9904/04\\_04.htm](http://www.tokachi.co.jp/kachi/9904/04_04.htm)

場所・フリース「釧路昔むかし 江戸時代の釧路のページ」釧路市史編さん事務局協力、ホツカイネット

<http://www.hokkai.or.jp/history/kusiro-mukasi/index.html>

領土と千島アイヌ「釧路正教会百年の歩みのページ (教会としての見方から)」釧路ハリストス正教会

<http://www.orthodox-jp.com/kushiro/history.htm>